富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第21集

富山県ボランティア埋蔵文化財
保護活動事業発掘体験講座

平成10年度　婦負郡婦中町　**勅使塚古墳**

平成11年度　中新川郡上市町　**永代遺跡**

平成12年度　東砺波郡福野町　**安居窯跡群**

平成13年度　射水郡小杉町　**中山中遺跡**

発掘調査報告

２００３年

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

上　勅使塚古墳墓坑（北から）　下　勅使塚古墳出土遺物

上　永代遺跡全景（東から）　下　永代遺跡出土遺物

左上　安居窯跡群１号窯出土遺物　右上　安居窯跡群２号窯出土遺物　下　安居窯跡群２号窯出土遺物

上　中山中遺跡102号住居（南西から）　下　中山中遺跡102号住居出土遺物

富山県ボランティア埋蔵文化財
保護活動事業発掘体験講座

平成10年度　婦負郡婦中町　**勅使塚古墳**

平成11年度　中新川郡上市町　**永代遺跡**

平成12年度　東砺波郡福野町　**安居窯跡群**

平成13年度　射水郡小杉町　**中山中遺跡**

発掘調査報告

２００３年

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

富山県民のボランティア活動に対する関心の高まる中で，「遺跡の発掘を遠くから見るだけでなく，実際に自ら体験発掘したい」という方々に，ボランティア参加を募ってその希望を叶え，埋蔵文化財の保護意識を深めていただこうと計画し，平成10年度から発掘体験講座として実施してきました発掘調査本報告書をここに上梓する運びとなりました。

できるだけ広い範囲から多数のボランティア参加を願おうという目的で県内各地域を代表する遺跡を選びました。平成10年度は婦負地区から婦中町勅使塚古墳，11年度は新川地区から上市町永代遺跡，12年度は砺波地区から福野町安居窯跡群，13年度は射水地区から小杉町中山中遺跡を選び調査発掘し，その概要は既にレポートとして速報いたしました。14年度は4遺跡すべての本格整理作業を行い，ここに最終報告書を刊行する次第です。

それまで富山県の史跡指定となっておりましたが未発掘のため年代はおろか墳丘の形さえも不詳であった勅使塚古墳は，今回の発掘調査による出土遺物から3世紀末と断定でき，全長66mの，低平で撥形に開く前方部に非常に高い後方部がつく出現期の前方後方墳であることがわかりました。また後方部中央に埋葬施設の存在を確認しています。永代遺跡では縄文時代中期の土器，石器を伴う竪穴住居，安居窯跡群では飛鳥時代の多数の須恵器を焼いた窯を2基確認，そして中山中遺跡では弥生時代末～古墳時代初期の住居を調査しました。

この体験発掘調査は規模の小さい発掘ではありましたが，4遺跡の今後の遺構保存措置を講じるための大切な基礎資料が得られたと考えています。

暑い季節の竹藪等の湿気の中で奮闘されたボランティアの方々のご苦労に厚く感謝いたします。

平成15年3月

富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　桃野　真晃

例　　言

1　本書は富山県婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は富山県教育委員会からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	勅使塚古墳	平成10（1998）年８月３日～平成10（1998）年10月16日
	永代遺跡	平成11（1999）年８月６日～平成11（1999）年10月２日
	安居窯跡群	平成12（2000）年６月26日～平成12（2000）年８月９日
	中山中遺跡	平成13（2001）年９月３日～平成13（2001）年10月19日
整理期間		平成14（2002）年４月１日～平成15（2003）年３月31日

4　本書の編集・執筆は，上野　章，酒井重洋，中川道子，青山裕子が担当し，執筆分担は文末に記した。

5　発掘調査の準備計画から本書の作成に至るまで，下記の方々や機関から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略）

宇野隆夫，各願寺，片井義雄，川田工業株式会社，共栄土木，地域生活支援交流ハウスふらっと，都出比呂志，藤田富士夫，安川邦雄，山内賢一，山口松蔵，若松伸廣，若松文夫，富山大学人文学部考古学研究室，富山県民生涯学習カレッジ，富山県立ふるさと養護学校，上市町教育委員会，小杉町教育委員会，福野町教育委員会

凡　　例

1　本書で示す方位は全て真北である。

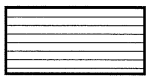
2　挿図の縮尺は各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。

3　遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＤ：溝，ＳＩ：竪穴住居，ＳＫ：土坑，ＳＰ：柱穴，ＳＸ：その他

4　遺物は遺跡毎に連番を付す。遺物番号は写真図版中の遺物番号と一致する。

5　遺構図中の地山はスクリーントーンで示す。それ以外は，それぞれの図・文を参照されたい。



地山

6　遺跡の略号は，勅使塚古墳19ＴＺ，永代遺跡32ＥＴ，安居窯跡群33ＹＳ，中山中遺跡22ＮＮで，遺物の注記には略号を用いた。

7　土層注記・遺物の胎土・色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版標準土色帖」を使用した。

目　次

第Ⅰ章　ボランティア埋蔵文化財保護活動 …… 1

1　事業趣旨 …… 1
2　事業概要 …… 1
3　受講者 …… 1
4　調査・整理体制 …… 2

第Ⅱ章　発掘調査 …… 3

1　勅使塚古墳 …… 3
A　遺跡の概要 …… 3
B　墳　丘 …… 4
C　主体部 …… 9
D　遺　物 …… 17
E　まとめ …… 18

2　永代遺跡 …… 27
A　遺跡の概要 …… 27
B　遺　構 …… 27
C　遺　物 …… 27
D　まとめ …… 34

3　安居窯跡群 …… 39
A　遺跡の概要 …… 39
B　遺　構 …… 40
C　遺　物 …… 45
D　安居窯跡の器種組成 …… 59
E　叩き目文について …… 59
F　須恵器の時期について …… 65
G　まとめ …… 65

4　中山中遺跡 …… 69
A　遺跡の概要 …… 69
B　遺　構 …… 70
C　遺　物 …… 72
D　まとめ …… 86

第Ⅲ章　ボランティア発掘体験講座参加記録 …… 89

1　平成10年度 …… 89
A　発掘調査を体験した印象 …… 89
B　埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想 …… 90

2　平成11年度 …… 92
A　発掘調査を体験した印象 …… 92
B　埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想 …… 93

3　平成12年度 …… 96
A　発掘調査を体験した印象 …… 96
B　埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想 …… 97

4　平成13年度 …… 100
A　発掘調査を体験した印象 …… 100
B　埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想 …… 101

5　平成14年度 …… 103
A　遺物整理を体験した印象 …… 103
B　埋文ボランティア発掘体験講座に参加した感想 …… 105

巻首図版目次

巻首図版一　勅使塚古墳　墓坑　出土遺物
巻首図版二　永代遺跡　全景　出土遺物
巻首図版三　安居窯跡群　1号窯・2号窯出土遺物
巻首図版四　中山中遺跡　102号住居　102号住居出土遺物

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 3
第３図　勅使塚古墳墳丘復元図 …… 5
第４図　遺構実測図　1トレンチ　2トレンチ　3トレンチ …… 8
第５図　遺構実測図　5トレンチ …… 9
第６図　遺構実測図　6トレンチ　11トレンチ …… 10
第７図　遺構実測図　7トレンチ　8トレンチ …… 11
第８図　遺構実測図　9トレンチ　10トレンチ …… 12
第９図　遺構実測図　4トレンチ …… 13
第10図　遺物実測図　1トレンチ …… 14
第11図　遺物実測図　1トレンチ～4トレンチ　7トレンチ　8トレンチ　10トレンチ　11トレンチ …… 15
第12図　遺物実測図　1トレンチ　3トレンチ～7トレンチ　10トレンチ …… 16
第13図　富山県内の出現期～前期古墳位置図 …… 17
第14図　周辺の遺跡 …… 28
第15図　調査区及び遺構図 …… 28
第16図　遺構実測図　ＳＩ11　ＳＩ12 …… 29
第17図　遺物実測図　ＳＩ11　ＳＩ13　包含層 …… 31
第18図　遺物実測図　包含層 …… 32
第19図　遺物実測図　ＳＩ11　ＳＩ12　ＳＩ13　包含層 …… 33
第20図　遺物実測図　ＳＩ12　ＳＩ13　包含層 …… 34
第21図　遺物実測図　ＳＩ11　ＳＩ12　ＳＩ13　包含層 …… 35
第22図　遺物実測図　ＳＩ12　ＳＩ13　包含層 …… 36
第23図　周辺の遺跡 …… 39
第24図　地形と発掘区 …… 40
第25図　トレンチ配置図及び遺構図 …… 42
第26図　遺構実測図　３号墳　８号墳 …… 42
第27図　遺構実測図　１号窯　２号窯 …… 43
第28図　遺構実測図　１号窯 …… 44
第29図　安居ロノ部い窯跡出土遺物の種類 …… 46
第30図　遺物実測図　１号窯　２号窯　包含層 …… 49
第31図　遺物実測図　２号窯 …… 50
第32図　遺物実測図　２号窯 …… 51
第33図　遺物実測図　１号窯　２号窯 …… 52
第34図　遺物実測図　２号窯 …… 53
第35図　遺物実測図　１号窯　２号窯 …… 54
第36図　遺物実測図　２号窯 …… 55
第37図　遺物実測図　２号窯　３号墳 …… 56
第38図　遺物実測図　２号窯 …… 57
第39図　遺物実測図　２号窯 …… 58
第40図　甕の口縁部形態 …… 58
第41図　叩き目文模式図 …… 60
第42図　須恵器体部の叩き目文（１） …… 60
第43図　須恵器体部の叩き目文（２） …… 61
第44図　須恵器体部の叩き目文（３） …… 62
第45図　須恵器体部の叩き目文（４） …… 63
第46図　１・２号窯の叩き目文関係図 …… 64
第47図　須恵器法量 …… 65
第48図　須恵器窯跡の分布と操業期間 …… 66
第49図　周辺の遺跡 …… 69
第50図　調査区及び遺構図 …… 70
第51図　遺構実測図　ＳＩ102　ＳＤ101 …… 71
第52図　遺物実測図　ＳＩ102 …… 73
第53図　遺物実測図　ＳＩ102 …… 74
第54図　遺物実測図　ＳＤ104　包含層 …… 75
第55図　遺物実測図　ＳＤ101　ＳＩ102　ＳＤ104　ＳＰ107　ＳＫ114　包含層 …… 76
第56図　遺物実測図　包含層 …… 79
第57図　遺物実測図　包含層 …… 80
第58図　遺物実測図　包含層 …… 81
第59図　遺物実測図　包含層 …… 82
第60図　遺物実測図　包含層 …… 83
第61図　遺物実測図　包含層 …… 84
第62図　遺物実測図　包含層 …… 85
第63図　遺物実測図　ＳＩ102　包含層 …… 87

表目次

第１表　遺跡一覧 …… 3
第２表　遺跡一覧 …… 28
第３表　遺跡一覧 …… 39
第４表　安居窯跡須恵器器種組成 …… 59
第５表　遺跡一覧 …… 69

図版目次

図版１　後方部　１トレンチ　２トレンチ …… 19
図版２　後方部・くびれ部　３トレンチ　６トレンチ　11トレンチ …… 20
図版３　後方部　７トレンチ　10トレンチ …… 21
図版４　前方部　５トレンチ　８トレンチ　９トレンチ …… 22
図版５　墓　坑　４トレンチ …… 23
図版６　出土遺物　１トレンチ　４トレンチ　７トレンチ　10トレンチ …… 24
図版７　出土遺物　１トレンチ …… 25
図版８　出土遺物　１トレンチ～８トレンチ　11トレンチ …… 26
図版９　遺構　ＳＩ11 …… 37
図版10　遺構・出土遺物　ＳＩ11　ＳＩ12　包含層 …… 38
図版11　遺構　１号窯　２号窯　３号墳 …… 67
図版12　出土遺物　１号窯　２号窯 …… 68
図版13　出土遺物　ＳＩ102　ＳＤ104　３トレンチ …… 77
図版14　出土遺物　ＳＩ102　包含層 …… 88

第Ⅰ章　ボランティア埋蔵文化財保護活動

1　事業趣旨

近年，埋蔵文化財に対する一般県民の関心が高まり，発掘調査に参加したいという声が強くなってきている。この要望に応えて，埋蔵文化財の分野においてもボランティアを募り，優れた人材を吸収してその社会活動の場を広げ，またボランティアが発掘調査を実際に体験することにより，埋蔵文化財の保護意識を深めていくものである。

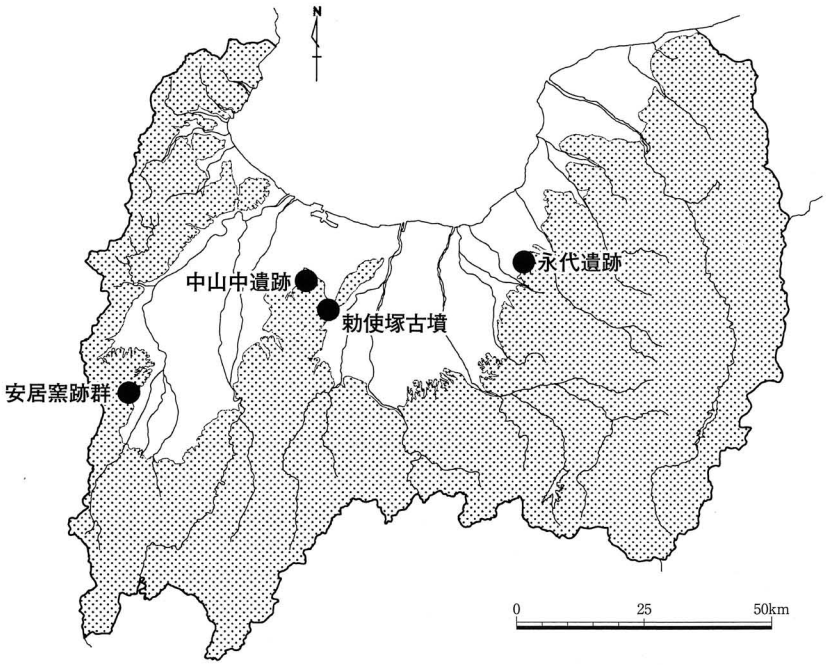
2　事業概要

平成10年度から５ケ年の限定で富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業が企画された。その事業の一環として，県内各地域各時代を代表する遺跡を選び，初年度の平成10年度は婦負郡婦中町勅使塚古墳，平成11年度は中新川郡上市町永代遺跡，平成12年度は東砺波郡福野町安居窯跡群，平成13年度は射水郡小杉町中山中遺跡で発掘体験講座を，平成14年度にはその４遺跡から出土した遺物の整理体験講座を実施した。各年度の延べ調査面積，ボランティア調査・整理延べ参加人数は以下に記す。

平成10年度　勅使塚古墳　390m²，　137人
平成11年度　永代遺跡　374m²，　107人
平成12年度　安居窯跡群　168m²，　107人
平成13年度　中山中遺跡　241.5m²，　109人
平成14年度　整理体験　45人

3　受講者（敬称略，五十音順）

荒木宗男　池田栄蔵　池田孝一　市島靖子　上田伸一　往蔵久雄　岡崎　茂　岡崎真理　嘉指義夫
金子　清　喜多　稔　京田悦子　小西景子　澤村清子　清水信義　志村幸光　杉木信子　高木末吉
高木美奈子　高島幸代　高見益代　竹田　勤　田中清章　西田弘二　野田正美　広田喜重
伏黒日出松　藤島牧子　二上玲子　堀　康廣　牧野寛史　増山嘉奈恵　松城由佳　松本孝司
宮井裕子　村林千鶴子　安川邦雄



第１図　遺跡位置図

4　調査・整理体制

平成10（1998）年度

総　　括　桃野真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
庶　　務　宮成真幸　埋蔵文化財調査事務所主任　　江本裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調査担当　中川道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事　三島道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
調査指導　西井龍儀　富山考古学会幹事

平成11（1999）年度

総　　括　桃野真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　上野　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成真幸　埋蔵文化財調査事務所主任　　江本裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　狩野　睦　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
調査担当　酒井重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
　　吉田裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事　深堀　茜　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
調査指導　西井龍儀　富山考古学会幹事

平成12（2000）年度

総　　括　桃野真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　上野　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中慎一　埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐　江本裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　狩野　睦　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
調査担当　酒井重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
　　吉田裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事　深堀　茜　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
調査指導　西井龍儀　富山県文化財保護審議委員

平成13（2001）年度

総　　括　桃野真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　肥田啓章　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中慎一　埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐　江本裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　酒井重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
調査担当　青山裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事　深堀　茜　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
調査指導　西井龍儀　富山県文化財保護審議委員

平成14（2002）年度

総　　括　桃野真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　肥田啓章　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中慎一　埋蔵文化財調査事務所総務課長補佐　広田英貴　埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括　酒井重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
整理担当　中川道子　埋蔵文化財調査事務所主任　　青山裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
整理指導　西井龍儀　富山県文化財保護審議委員

第Ⅱ章　発掘調査

1　勅使塚古墳

A　遺跡の概要

婦負郡婦中町は，富山県のほぼ中央に位置し，町の北および東は富山市に接し，南は八尾町・山田村，西は砺波市・小杉町に接している。地勢は，東部に神通川と井田川により形成された扇状地が広がり，西部は呉羽丘陵から射水丘陵，牛岳へと連なる丘陵性山地が占める。

富山県指定史跡「勅使塚古墳」が位置する射水（羽根山）丘陵は，北に連なる呉羽丘陵とともに富山平野のほぼ中央に突出し，これを東西にほぼ二分する低丘陵で，旧石器時代～近世に至る集落・墓地・生産遺跡・城館など多種多様な遺跡が存在し，県内の遺跡密集地帯の一つである。旧石器時代～縄文時代草創期の遺物は，その多くが単独出土であるのに対し，縄文時代前期～後期には平岡遺跡・二本榎Ⅰ遺跡等の集落遺跡がみられ，この丘陵が生活拠点となっていることが窺える。これに対し，弥生時代～古墳時代の集落遺跡は，弥生時代中期の千里Ｃ遺跡，後期後半～古墳時代前期の富崎赤坂遺跡，富崎遺跡，鍛冶町遺跡，千坊山遺跡，南部Ⅰ遺跡，古墳時代後期の下邑東遺跡等が丘陵辺縁部から河岸段丘上にみられる。丘陵上には多数の墳丘墓・古墳があり，県下でも有数の古墳密集地となっている。勅使塚古墳は標高約130mの小丘陵先端に立地し，その周辺だけでも，北約500mに小さな谷を挟み国指定史跡「王塚古墳」，南約500mに5基の方墳からなる五ツ塚古墳群，東の低位段丘面に

第２図　周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代
1	勅使塚古墳	古墳
2	王塚古墳	古墳
3	五ツ塚古墳	古墳
4	向野塚	弥生・古代・中世
5	六治古塚	弥生・古代・中世
6	千坊山遺跡	旧石器・縄文・弥生・古代・中世
7	鏡坂墳墓群	弥生
8	鍛冶町遺跡	弥生・古墳・古代・中世・近世
9	離山砦遺跡	弥生・中世
10	富崎赤坂遺跡	弥生
11	富崎城遺跡(富崎墳墓群)	縄文・弥生・古代・中世
12	富崎遺跡	弥生・古代・中世・近世
13	富崎千里古墳群	古墳
14	南部Ⅰ遺跡	弥生・古墳・古代・中世・近世
15	添ノ山古墳	弥生？
16	小長沢古墳群	古墳
17	新町大塚古墳	中世？古墳？
18	新町横穴墓	古墳？
19	下邑東遺跡	古墳・古代
20	平岡遺跡	縄文
21	宮ノ高Ａ遺跡	縄文
22	小長沢Ⅱ遺跡	縄文・古代・中世・近世
23	二本榎遺跡	縄文・中世？
24	二本榎Ⅱ遺跡	縄文・古代・近世
25	二本榎Ⅲ遺跡	古代・中世・近世
26	新町Ⅰ遺跡	古代
27	王塚古墳北遺跡	縄文
28	羽根北遺跡	不明
29	新町Ⅲ遺跡	古代
30	新町Ⅱ遺跡	縄文・古代・中世・近世
31	鶴ヶ城跡	中世
32	下邑遺跡	縄文・古代・中世・近世
33	各願寺前遺跡	縄文・古代・中世
34	古里保養園前遺跡	縄文・弥生？
35	菅谷城跡	中世
36	家老屋敷城跡	中世
37	長沢城跡	中世
38	鏡坂Ⅱ遺跡	中世
39	鏡坂Ⅲ遺跡	縄文
40	鏡坂Ⅰ遺跡	縄文・古代
41	蓮花寺遺跡	中世
42	外輪野Ⅰ遺跡	縄文・中世・近世
43	外北A遺跡	不明
44	富崎城西遺跡	縄文
45	富崎南野遺跡	縄文・古代・中世
46	上吉川Ⅰ遺跡	弥生・古代・中世・近世
47	下瀬向山遺跡	不明
48	下瀬砦	中世
49	赤坂砦	中世
50	森田山砦	中世
51	千里片坂遺跡	不明
52	ゴダイ塚	中世

第１表　遺跡一覧

小長沢３号墳・新町大塚古墳がある。古代には東側裾部に形成された低位段丘面に新町Ⅱ遺跡等の集落遺跡，丘陵北側は須恵器窯跡群，製鉄遺跡群が密集した一大生産地となっており，古代以降急激に開発が進んだことを窺わせる。また，神通川流域は飛騨に抜ける陸路の幹線で，当地は古代から交通の要衝であったとみられ，中世には山城が多く築かれている。

B　墳　丘（第３～９図）

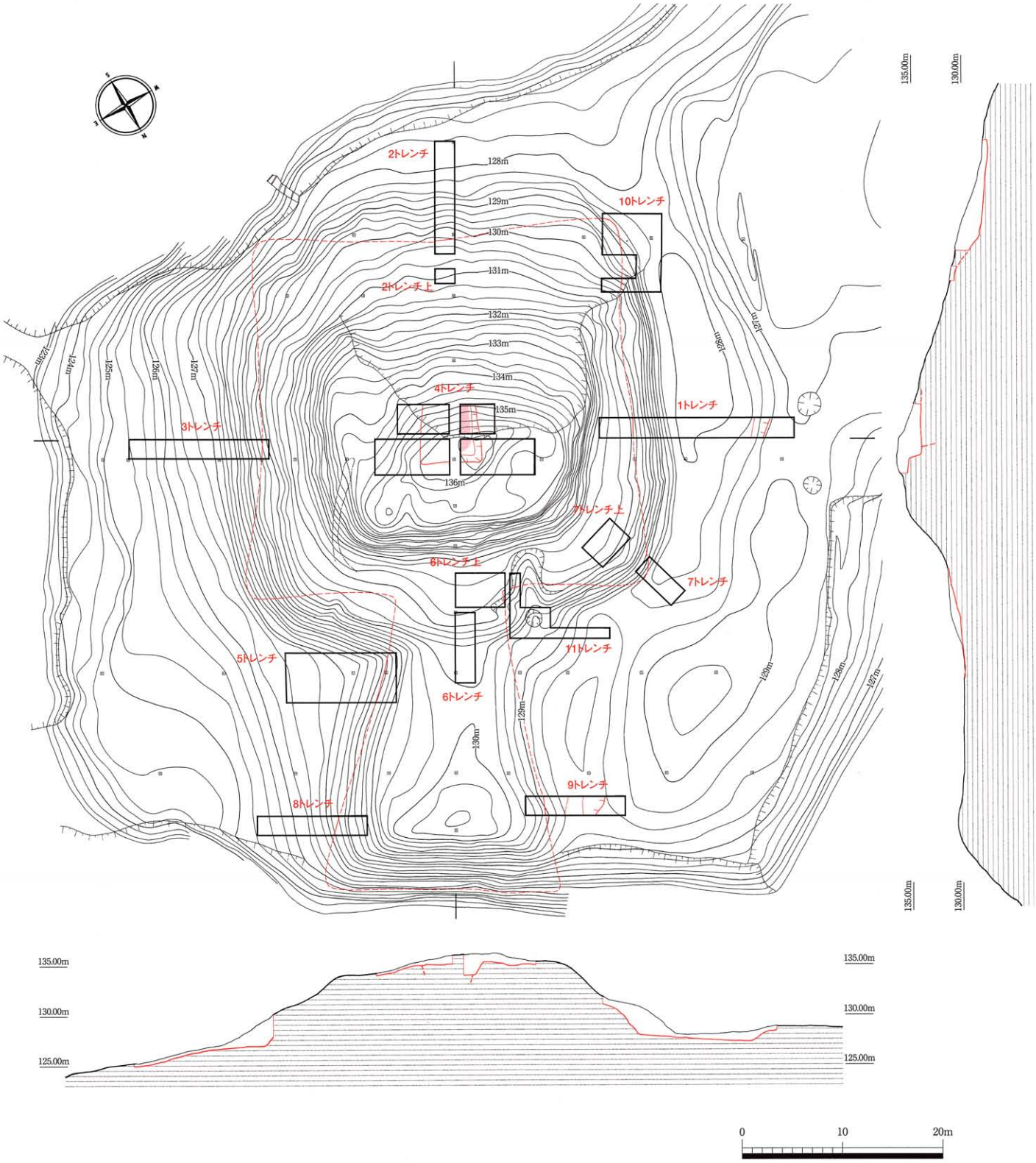
かつて勅使塚古墳はその形状を前方後円墳とする考えと，前方後方墳とする考えとがあり，規模についても正確な測量図がない状態で全長75mとされ，王塚古墳との先後関係についても諸説あった。そこで，富山大学人文学部考古学研究室による精緻な測量調査が行われ，全長70mの前方後方墳であるとされた〔富山大学1990〕。隅丸方形の後方部には三段築成の可能性があること，前方部と後方部の主軸がずれているのは立地する地形の制約と平野からの見かけをより大きく見せるためと考えられること，王塚古墳より後出の前期古墳の可能性がある等の成果とともに，後方部に対し前方部の長さが短すぎる感があること，後方部に後世の改変の可能性が考えられること，出土遺物が全く無いため築造時期が不明であるという問題点が提起された。

今回の発掘調査は古墳の形状，規模，埋葬施設の有無，古墳の構築時期を確定することを目的とし，墳丘に11箇所のトレンチを設けた。測量基準杭は富山大学の測量調査の際打設された保存原点を使用し，主軸に沿うように後方部から前方部にかけて３箇所，主軸に直交するように後方部に２箇所，前方部に２箇所，くびれ部に２箇所，後方部コーナーに２箇所設置し，調査の進行に伴いくびれ部の確認と，後方部コーナーを確認するため拡張区を設け，調査を行った。以下，各トレンチ順に述べる。

1トレンチ（第４図）　後方部北西側（丘陵側）に主軸と直交するように，後方部裾と周溝規模を確認するために設定した。1'層が表土，１～５層が流出土，６層は遺物が含まれる黒褐色シルト，７層は堅く締まった明褐色粘質シルト，８層は遺物を含む褐色シルト，16・17層はにぶい赤褐色シルト・赤褐色シルトなどの崩落土，15層は褐色粘質シルトの盛土である。崩落土は墳丘築造直後のものとみられ，ザラメ状である。６層は崩落が収まった後墳丘の形状が安定したことを示す。その上に堆積する厚い流出土は後世の改変によるものと推測され，段築成のようにみえる現況となっている。後方部裾は周溝下端となっており，標高128.02mを測る。墳丘は地山を削り出し，標高130.25m付近まで約53度の急勾配で立ち上がり，さらに上部へはやや角度を緩める。旧表土は標高130.25m付近に僅かにみられるのみで，それより上の部分は盛土である。旧表土には炭化物が多く混じることから，築造前に野焼きを行っていたと推測される。トレンチ内では段築は確認していない。周溝の底部分はほぼ平坦で，後方部裾から墳丘外側の周溝下端までの約11.5mは緩やかに傾斜しており，周溝下端の標高は127.50m，周溝上端の標高128.25m，肩部へは約37度で立ち上がる。出土遺物は調査したトレンチの中では最多で，分布は周溝底部全面であるが，特に墳丘裾に近いほど集中している。

2トレンチ（第４図）　後方部南西側に主軸に沿うように，後方部裾と周溝の有無を確認するために設定し，現況からは最も崩壊が激しいとみられた。1層は表土，２～５・８～12・16・17層が流出土，６層は安定期を示す灰褐色シルト，７・13～15層は崩落土で，14層はザラメ状である。18～22層は堅く締まった盛土，23層は旧表土である。トレンチは現況の緩傾斜部分まで最大限に設定したが，周溝はなく，やや傾斜した平坦面が造られる。墳丘裾は標高128.20m，地山削り出しで，立ち上がりの傾斜は約40度である。標高130.40m付近には旧表土が残り，それより上は盛土である。

3トレンチ（第４図）　後方部南東に主軸と直交するように，後方部裾と周溝の有無を確認するために設定した。１層が表土，２～９・15～18・21・22層が流出土で，21層には礫が混じる。10層は安



第３図　勅使塚古墳　墳丘復元図（富山大学人文学部考古学研究室作成の測量図に加筆）

定期を示す黒褐色シルト，12・13・19層は崩落土で，13・19・20層はザラメ状，12層は遺物を含む。墳丘裾は削り出しており，標高は126.99m，立ち上がりは約53度と急である。周溝は無いが，幅約４mの平坦面が造られ，自然地形へと移る。遺物は墳丘裾付近の崩落土内から出土している。

5トレンチ（第５図）　墳丘南東側（平野側）にくびれ部の規模を確認するために設定したが，くびれ部までは達せず，前方部から後方部へと幅を狭めていく前方部の裾を確認したのみである。層位は１層が表土，２～４層・12層が流出土，５・６層が安定期を示す黒褐色粘質シルトで，遺物（須恵器）が多く出土した。７～９・13～15層は崩落土で，８・9層はザラメ状である。10・11層には礫が混じり，上面の標高は127mを測る。墳丘は前方部側面から裾にかけて削り出し，傾斜は約55度の急勾配である。墳丘裾の標高は126.88m～126.58mを測り，周溝はなく，広い平坦面が造られている。

６トレンチ（第６図）　後方部と前方部のつなぎ部分の築造方法を確認するため，主軸に沿い設定したもので，６トレンチと６トレンチ上拡張区がある。６トレンチの層位は１層表土，２層流出土，３層は須恵器が出土した黒褐色粘質シルトで安定期を示す。４層は堅く締まった明褐色粘質シルト，５層が暗褐色シルト，６層が褐色粘質シルト，７層は縄文土器が出土した黒褐色シルトの旧表土で，旧表土は前方部先端に向かい薄くなる。９・10層は堅く締まった盛土で，旧表土が窪む箇所に盛土を積んでいる。11・12層は地山に類似している。前方部と後方部の境は標高131.20mの傾斜変換点で，地山を削り出した平坦な前方部から，後方部側に僅かに盛土をし，緩やかに傾斜する。また，３～６層は黒色と黄色の土が互層をなし，版築のようにみえる。

６トレンチ上拡張区ではくびれ部を確認した。１層表土，２～11層が流出土，12層は６トレンチの３層に対応する黒褐色粘質シルト，13層は堅く締まった盛土，16層が崩落土である。盛土はくびれ部にかけて僅かにみられる。くびれ部裾は標高129.28mを測り，上端は130.67m～129.50mと前方部へ傾斜する。屈曲の角度は裾で約100度，傾斜変換点では鋭角気味からほぼ直角に屈曲する。

７トレンチ（第７図）　後方部北コーナー部分を確認するため設定したもので，７トレンチと７トレンチ上拡張区がある。７トレンチの層位は１層表土，２～４層が流出土，５層は遺物を含み安定期を示す黒褐色粘質シルト，６・７層は周溝内に堆積したものである。墳丘コーナーは隅丸で，地山を削り出しており，コーナー裾の標高は127.79mである。トレンチ内からは赤彩され，底部を打ち欠いて穿孔した壺が１個体分つぶれた状態で出土しており，その場で使用・廃棄されたと考えられる。７トレンチ上拡張区はコーナーの形状確認のため設定した。１'層表土，１～５・10・11層が流出土，６層が安定期を示す黒褐色粘質シルト，７・８層は盛土，９層が旧表土である。地山は傾斜変換点の標高130.39mで緩やかなカーブを描く。旧表土は129.90m付近にみられ，それより上部は盛土である。

８トレンチ（第７図）　前方部南東側に主軸と直交するように，前方部裾と周溝の有無を確認するために設定した。層位は１層が表土，２・15層が流出土，３～７層は盛土，８～10層は旧表土，11～14層がザラメ状の崩落土である。裾部の標高は126.40m～126.29m，傾斜変換点の標高は127.47m～127.25mと先端に向け傾斜している。裾から側面にかけては地山を削り出して成形しており，立ち上がりの角度は約47度である。旧表土は標高129.95m～127.67mに残っており，盛土は前方部先端部分のみである。他トレンチで確認した盛土には混入物が少ないのに対し，この盛土は灰褐色シルトに明赤褐色土・黄褐色土・黒褐色土がブロック状に混じる。周溝はなく，幅２m程の平坦面が造られ，自然地形へと移る。

９トレンチ（第８図）　前方部北西側に主軸と直交するように，前方部裾と周溝の規模を確認するために設定した。１層が表土，２・３層が流出土，４・５層が周溝内に堆積したもの，６・７層は

崩落土，９層が旧表土である。墳丘裾は周溝の墳丘側下端となっており，裾の標高は127.58m～127.68m，墳丘の傾斜変換点は標高128.60mで，旧表土を僅かに残す。墳丘側面は地山を削り出しており，その傾斜は約40度である。周溝の幅は５～6.5mと一定ではなく，前方部先端に向けて幅を狭めながら徐々に浅くなる。断面形はＶ字形をなし，墳丘外側の周溝下端の標高は127.67m～127.53m，上端は128.19m～128.08mと先端に向け傾斜しており，立ち上がりの傾斜は約15度である。

10トレンチ（第８図）　後方部南西コーナーを確認するために設定した。１層が表土，２～６層は流出土，７・８層は安定期を示す黒褐色粘質シルト，９・10・15層は堅く締まった崩落土，11・14層がザラメ状の崩落土，12層は旧表土，16・17層も崩落土である。墳丘コーナーはやや隅丸に地山を削り出し，裾の標高は127.76m～127.93mで，コーナー部には小さな平坦面を確認した。墳丘への立ち上がりの傾斜はコーナーに向け約45度～40度とやや緩やかになり，標高129.93mに傾斜変換点がある。コーナーから墳頂へは約20度の勾配である。

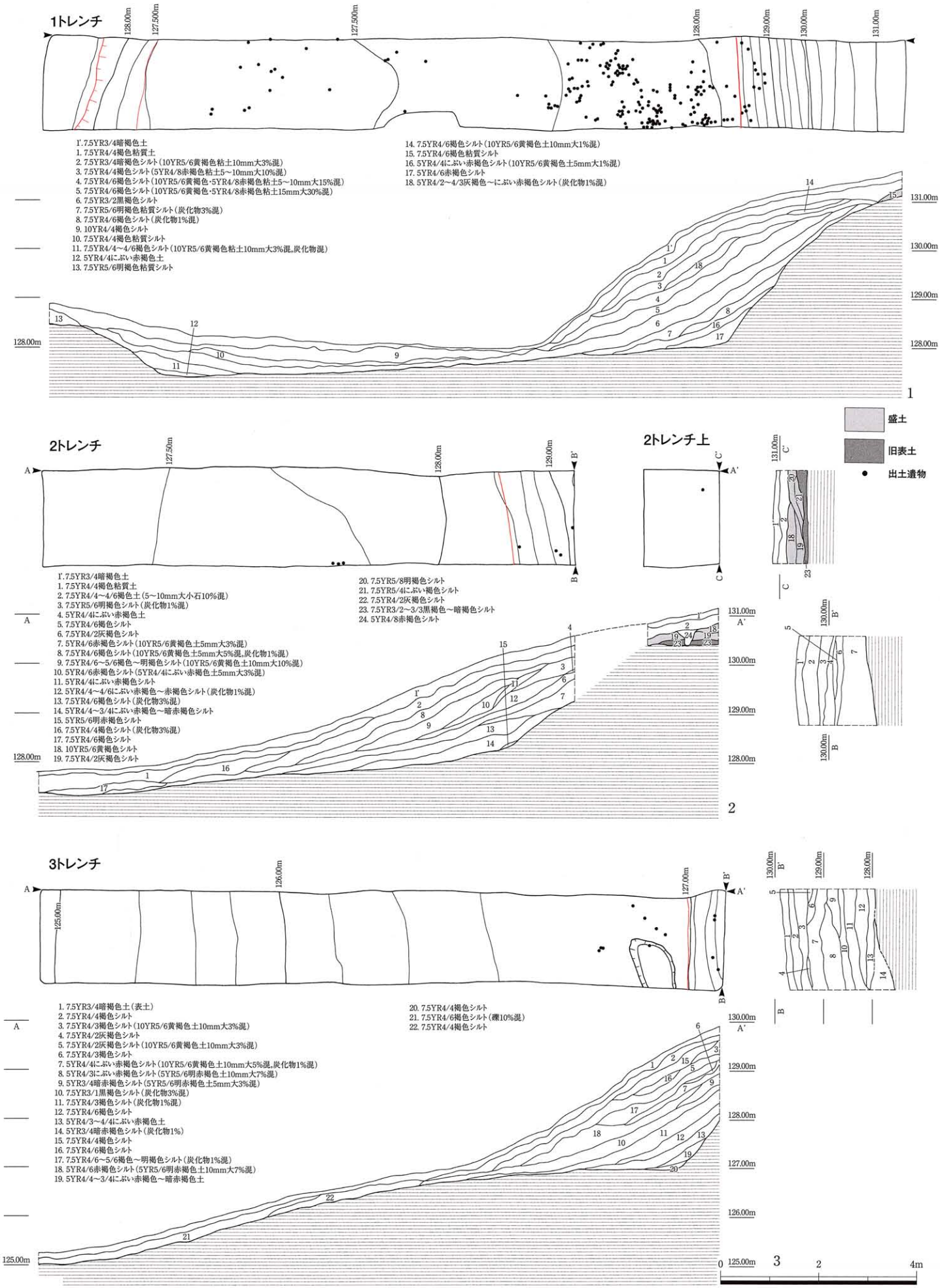
11トレンチ（第６図）　墳丘北西側にくびれ部と後方部裾，周溝の規模を確認するため，６トレンチに沿うように逆Ｌ字形に設定した。１層は表土，２～13・18・19・22～24層が流出土であるが，23層はとくに締まりがない。14層は黒色シルト，15層は堅く締まった崩落土，16・17層がザラメ状の崩落土，20・21・25～28層は周溝内に堆積したものである。６トレンチに平行した部分で確認した後方部裾の標高は129.32mで，後方部への立ち上がりは裾から約50度と急勾配であるが，標高130.20mの傾斜変換点から上へは約30度となっている。

墳丘の復原

以上の結果から，勅使塚古墳の墳丘形態と規模についてまとめる。勅使塚古墳は前方部を北東に向ける前方後方墳で，主軸はＮ－30°－Ｅである。墳丘裾は地山削り出しで成形しており，傾斜は裾からが最も急勾配で，平野側で47～55度，丘陵側で40～53度となっている。旧表土の標高は丘陵側後方部で130～131m，前方部で128.7mであるのに対し，平野側は前方部の８トレンチで127.5mとなり，かなり差があるが，これは墳丘主軸を南東に伸びる尾根筋に直交させるように立地していることによると考えられる。盛土は前方部の先端のごく僅かな部分と後方部の大部分に積んでおり，現況で推測された後方部の段築成はみられない。なお，前方部前面は急斜面の谷になっており，測量調査の際に墳丘裾とされた僅かな平坦部分を，本調査でも裾と判断している。

墳丘築造前には野焼きを行い，墳丘の丘陵側には周溝，平野側には平坦面を造る。周溝は全般的に浅く，後方部側が広く，前方部に向けて狭くなる。また，後方部南西側に向けては浅くなり，コーナー裾には小さな平坦面が造られていることから，周溝が平坦面となっていくものと推測する。平野側の平坦面はくびれ部で最も広く，前方部先端に向かい幅を狭めている。

後方部の長さ36m（主軸に沿った墳丘裾間35m），幅40m（同37m），最高点標高136.59m，裾の標高平均値は127.75mで，裾標高平均値と後方部最高点の標高との差は8.84mとなる。くびれ部は幅10m，最高点の標高は131.20m，裾の標高は129.28m，比高1.92mである。前方部は長さ31m，幅は復元で約24m（確認した裾間21m），最高点の標高130.55m，裾の標高は周溝下端で平均127.63m，前方部最高点との比高2.92m，平野側の裾標高平均値は126.34m，前方部最高点との比高は4.21mとなる。墳丘の全長は66m，墳丘における最高点の標高と最低点の標高の比高は10.3m，後方部最高点の標高と前方部最高点の標高の比高は6.04mである。平野側には平坦面を設け，丁寧に造っていることから，平野からの見かけを重視していると考えられる。以上のように勅使塚古墳は，やや四隅が突出した糸巻き形に近い形態の後方部と，低平で撥形に開く前方部をもつ，最古式かつ定型化された墳丘形態を



第4図　遺構実測図（1：100）

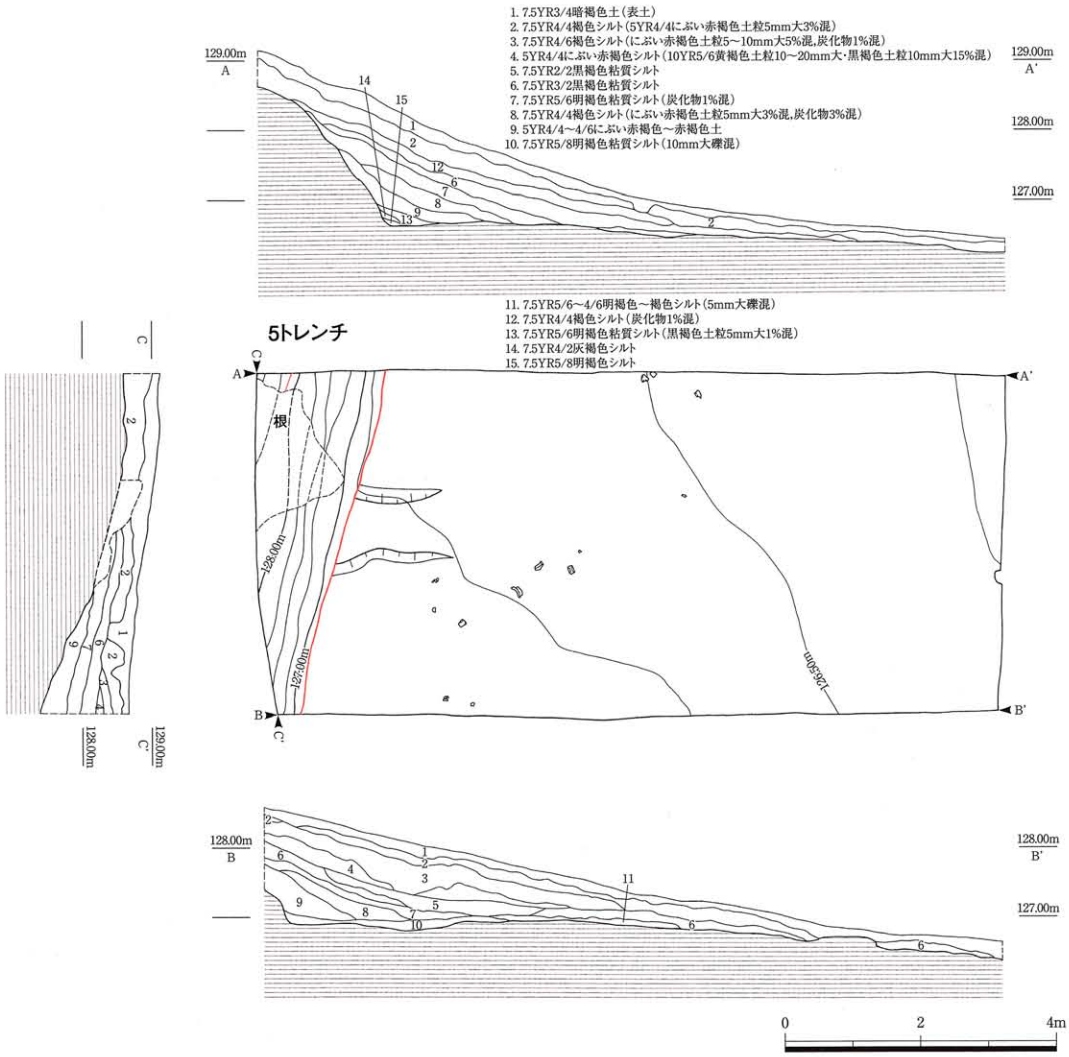
1. 1トレンチ　2. 2トレンチ　3. 3トレンチ

もつ。以下に主要な計測値を再掲する。

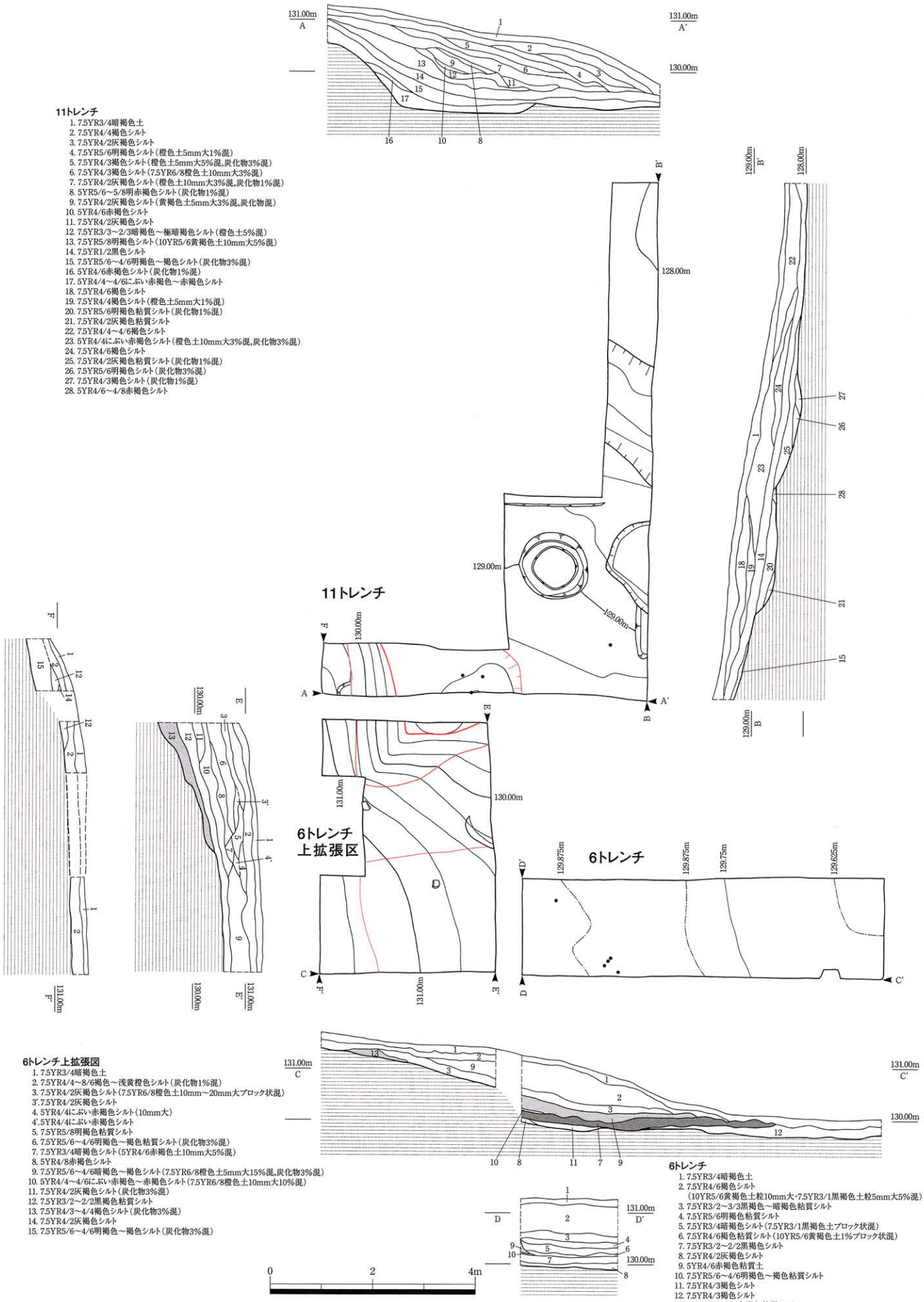
墳　　形	前方後方墳	後方部高	8.84m
全　　長	66m	前方部高	3.56m
後方部長	35m	くびれ部高	1.92m
後方部幅	37m	後方部最高点標高	136.59m
前方部長	31m	後方部裾標高（周溝下端）	128.00m
前方部幅	約24m（復原）	後方部裾標高（南西コーナー）	127.83m
くびれ部幅	10m	後方部裾標高（平野側）	126.99m
後方部裾標高平均	127.75m	くびれ部最高点標高	131.20m
前方部最高点標高	130.55m	くびれ部裾標高	129.28m
前方部裾標高（周溝下端）	127.63m	最高点と最低点比高	10.3m
前方部裾標高（平野側）	126.34m	後方頂と前方部頂比高	6.04m

C　主体部（第９図）

後方部頂のほぼ中央に４トレンチを設定し，北東・北西・南東・南西の４区画に分割した。後方部中央には幅9.5mの平坦面があり，墓坑はそのほぼ中央で検出し，形態は主軸に沿う長方形，規模は



第５図　遺構実測図（1：100）
5トレンチ



11トレンチ

1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR4/4褐色シルト
3. 7.5YR4/2灰褐色シルト
4. 7.5YR5/6明褐色シルト（橙色土5mm大1%混）
5. 7.5YR4/3褐色シルト（橙色土5mm大5%混,炭化物3%混）
6. 7.5YR4/3褐色シルト（7.5YR6/8橙色土10mm大3%混）
7. 7.5YR4/2灰褐色シルト（橙色土10mm大3%混,炭化物1%混）
8. 5YR5/6～5/8明赤褐色シルト（炭化物1%混）
9. 7.5YR4/2灰褐色シルト（黄褐色土5mm大3%混,炭化物混）
10. 5YR4/6赤褐色シルト
11. 7.5YR4/2灰褐色シルト
12. 7.5YR3/3～2/3暗褐色～極暗褐色シルト（橙色土5%混）
13. 7.5YR5/8明褐色シルト（10YR5/6黄褐色土10mm大5%混）
14. 7.5YR1/2黒色シルト
15. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色シルト（炭化物3%混）
16. 5YR4/6赤褐色シルト（炭化物1%混）
17. 5YR4/4～4/6にぶい赤褐色～赤褐色シルト
18. 7.5YR4/6褐色シルト
19. 7.5YR4/4褐色シルト（橙色土5mm大1%混）
20. 7.5YR5/6明褐色粘質シルト（炭化物1%混）
21. 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト
22. 7.5YR4/4～4/6褐色シルト
23. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（橙色土10mm大3%混,炭化物3%混）
24. 7.5YR4/6褐色シルト
25. 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（炭化物1%混）
26. 7.5YR5/6明褐色シルト（炭化物3%混）
27. 7.5YR4/3褐色シルト（炭化物1%混）
28. 5YR4/6～4/8赤褐色シルト

6トレンチ上拡張区

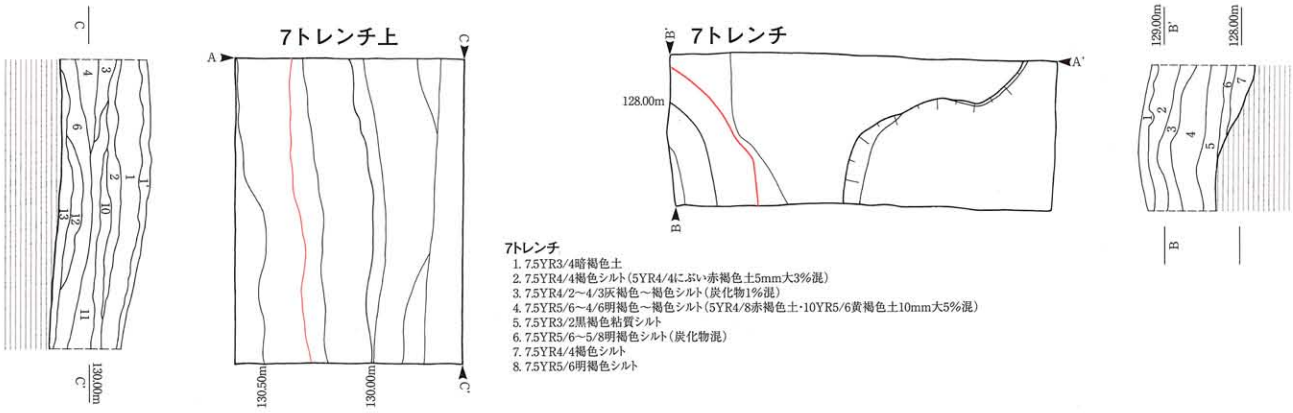
1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR4/4～8/6褐色～浅黄橙色シルト（炭化物1%混）
3. 7.5YR4/2灰褐色シルト（7.5YR6/8橙色土10mm～20mm大ブロック状混）
3'. 7.5YR4/2灰褐色シルト
4. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（10mm大）
4'. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト
5. 7.5YR5/8明褐色粘質シルト
6. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色粘質シルト（炭化物3%混）
7. 7.5YR3/4暗褐色シルト（5YR4/6赤褐色土10mm大5%混）
8. 5YR4/8赤褐色シルト
9. 7.5YR5/6～4/6暗褐色～褐色シルト（7.5YR6/8橙色土5mm大15%混,炭化物3%混）
10. 5YR4/4～4/6にぶい赤褐色～赤褐色シルト（7.5YR6/8橙色土10mm大10%混）
11. 7.5YR4/2灰褐色シルト（炭化物3%混）
12. 7.5YR3/2～2/2黒褐色粘質シルト
13. 7.5YR4/3～4/4褐色シルト（炭化物3%混）
14. 7.5YR4/2灰褐色シルト
15. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色シルト（炭化物3%混）

6トレンチ

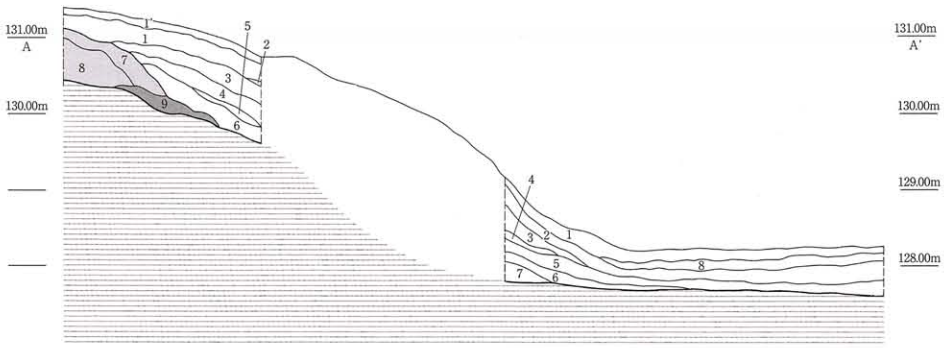
1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR4/6褐色シルト
（10YR5/6黄褐色土粒10mm大・7.5YR3/1黒褐色土粒5mm大5%混）
3. 7.5YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色粘質シルト
4. 7.5YR5/6明褐色粘質シルト
5. 7.5YR3/4暗褐色シルト（7.5YR3/1黒褐色土ブロック状混）
6. 7.5YR4/6褐色粘質シルト（10YR5/6黄褐色土1%ブロック状混）
7. 7.5YR3/2～2/2黒褐色シルト
8. 7.5YR4/2灰褐色シルト
9. 5YR4/6赤褐色粘質土
10. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色粘質シルト
11. 7.5YR4/3褐色シルト
12. 7.5YR4/3褐色シルト
13. 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト

第6図　遺構実測図（1：100）

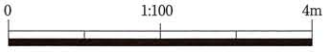
6トレンチ・11トレンチ



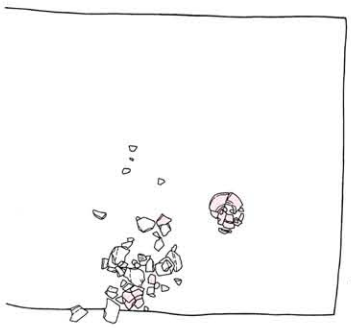
7トレンチ
1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR4/4褐色シルト（5YR4/4にぶい赤褐色土5mm大3%混）
3. 7.5YR4/2～4/3灰褐色～褐色シルト（炭化物1%混）
4. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色シルト（5YR4/8赤褐色土・10YR5/6黄褐色土10mm大5%混）
5. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
6. 7.5YR5/6～5/8明褐色シルト（炭化物混）
7. 7.5YR4/4褐色シルト
8. 7.5YR5/6明褐色シルト



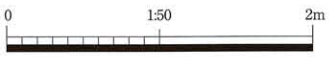
1

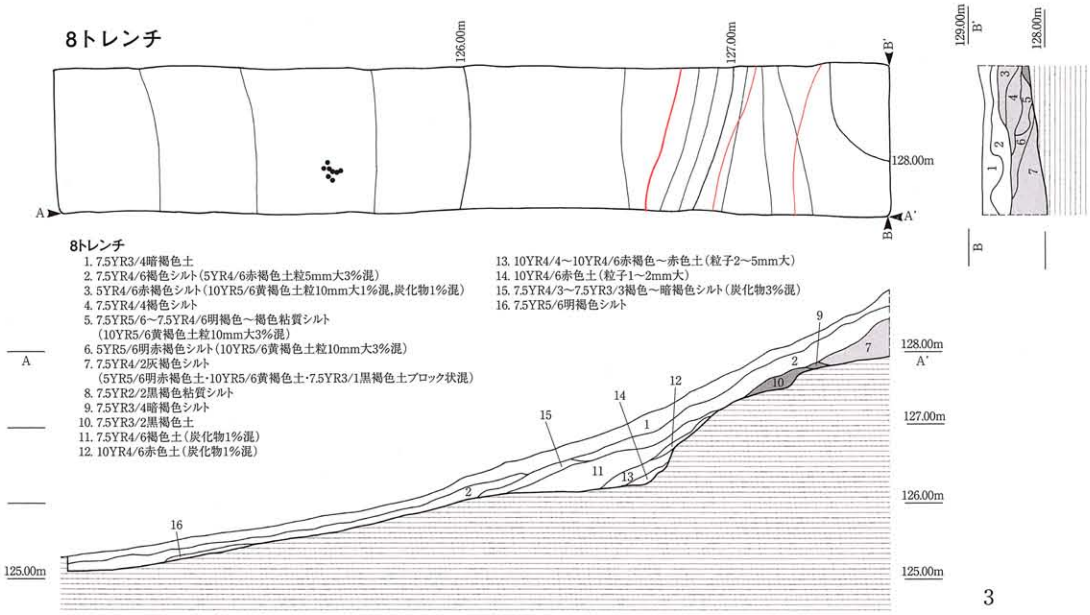


7トレンチ上
1'. 7.5YR3/4暗褐色土
1. 7.5YR4/4褐色シルト（5YR4/4にぶい赤褐色土粒5mm大3%混）
2. 7.5YR4/3褐色シルト（炭化物1%混）
3. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（5YR4/8赤褐色土粒・10YR5/6黄褐色土粒10mm大10%混）
4. 7.5YR4/6褐色シルト（5YR4/8赤褐色土粒・10YR黄褐色土粒10mm大20%混）
5. 5YR4/6赤褐色粘質シルト
6. 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト
7. 7.5YR5/6～4/6明褐色～褐色粘質シルト（5YR4/6赤褐色土粒10mm大3%混,炭化物1%混）
8. 10YR4/6褐色シルト（7.5YR2/2黒褐色土粒・10YR5/6黄褐色土粒5～15mm大15%混）
9. 7.5YR2/2黒褐色粘質シルト
10. 7.5YR4/2灰褐色シルト（10YR5/6黄褐色土粒5～10mm大3%混）
11. 2.5YR5/6～4/6明赤褐色～赤褐色シルト
12. 7.5YR2/2黒褐色粘質シルト
13. 7.5YR4/4褐色シルト



7トレンチ遺物出土状況
2





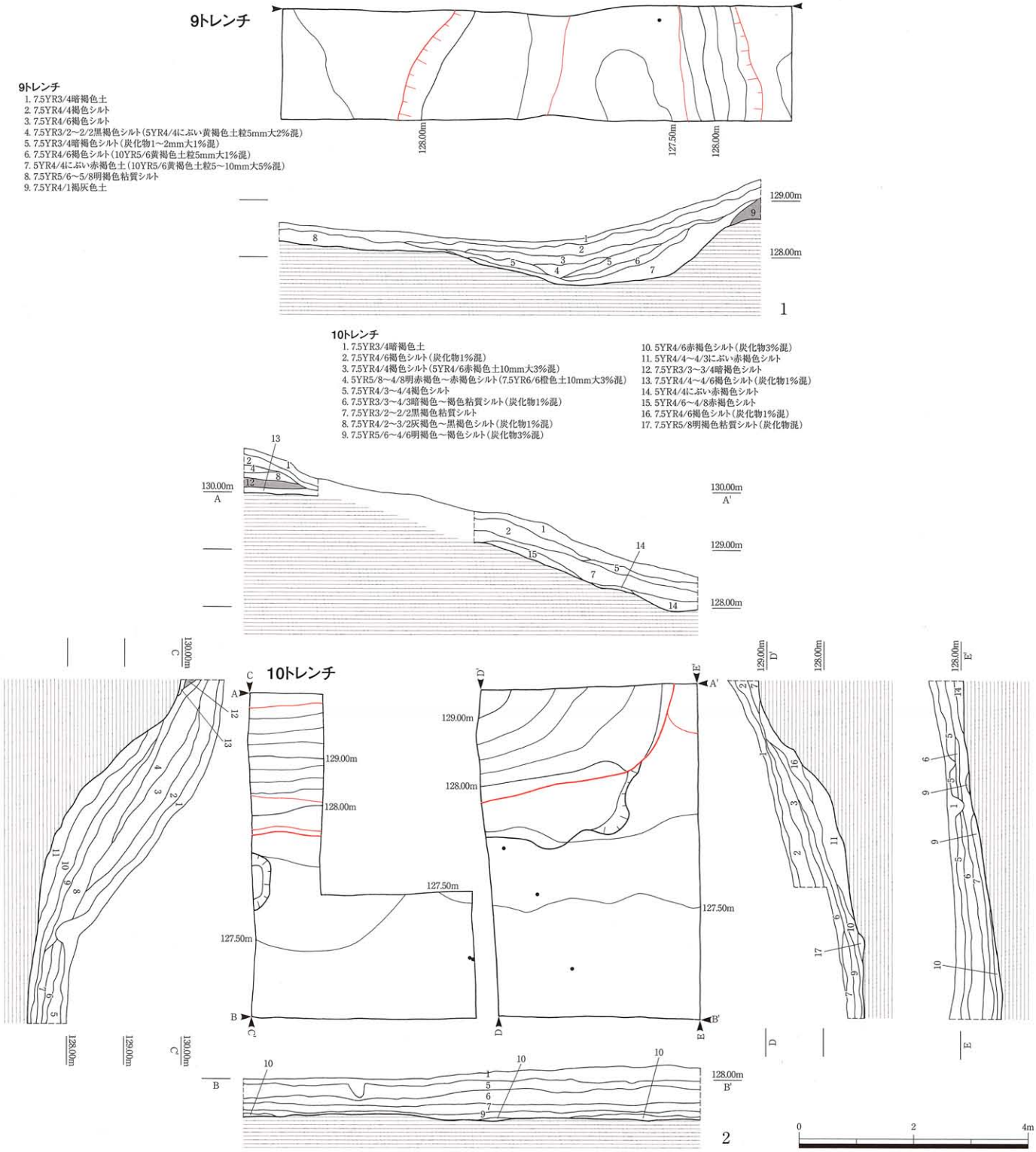
8トレンチ
1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR4/6褐色シルト（5YR4/6赤褐色土粒5mm大3%混）
3. 5YR4/6赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色土粒10mm大1%混,炭化物1%混）
4. 7.5YR4/4褐色シルト
5. 7.5YR5/6～7.5YR4/6明褐色～褐色粘質シルト（10YR5/6黄褐色土粒10mm大3%混）
6. 5YR5/6明赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色土粒10mm大3%混）
7. 7.5YR4/2灰褐色シルト（5YR5/6明赤褐色土・10YR5/6黄褐色土・7.5YR3/1黒褐色土ブロック状混）
8. 7.5YR2/2黒褐色粘質シルト
9. 7.5YR3/4暗褐色シルト
10. 7.5YR3/2黒褐色土
11. 7.5YR4/6褐色土（炭化物1%混）
12. 10YR4/6赤色土（炭化物1%混）
13. 10YR4/4～10YR4/6赤褐色～赤色土（粒子2～5mm大）
14. 10YR4/6赤色土（粒子1～2mm大）
15. 7.5YR4/3～7.5YR3/3褐色～暗褐色シルト（炭化物3%混）
16. 7.5YR5/6明褐色シルト

3

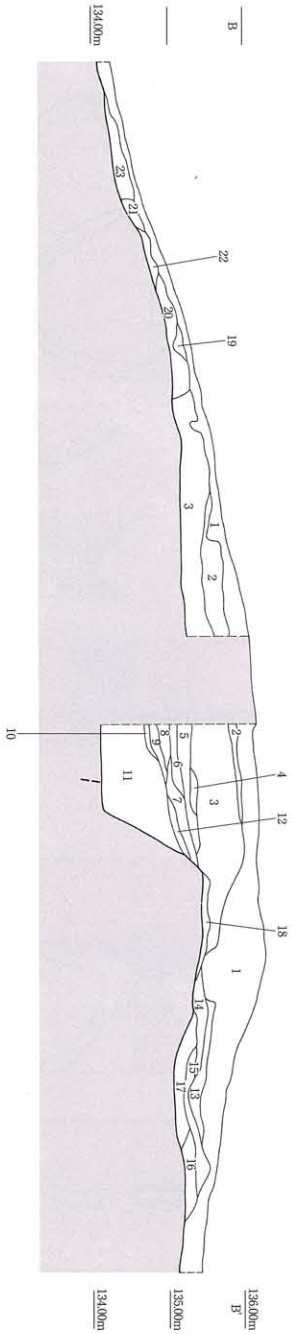
第７図　遺構実測図（１：100）

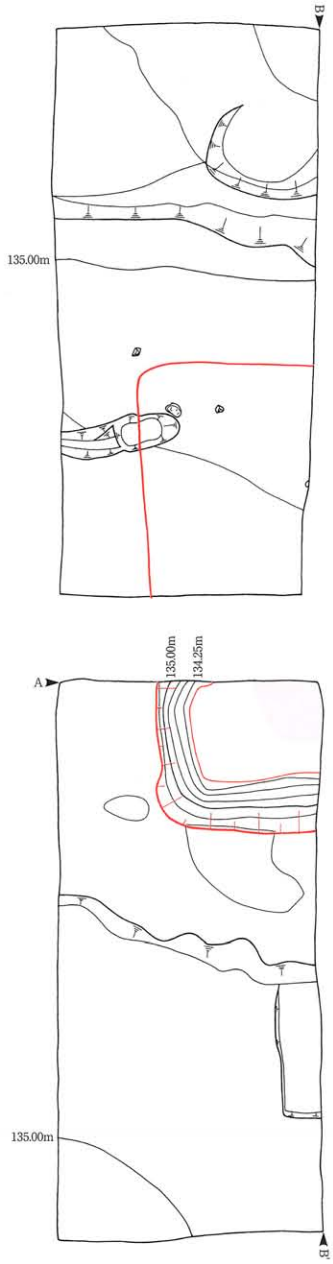
1. 7トレンチ　2. 7トレンチ遺物出土状況図　3. 8トレンチ

東西幅6.1m，南北長6.2m以上を測る。さらに北西・南西の２区画は墓坑を約120㎝掘り下げ，槨の痕跡を確認した。層位は１層が表土，２・３層が後方部最上層の盛土，11層から上部が墓坑を覆う盛土であるが，11層は堅く締まっており，一気に覆ったものである。北西ブロック端にみられる13～17層，南西ブロック端の19～23層は流出土である。墓坑・槨とも検出面は盛土であることから，一旦墳頂まで積まれた盛土を掘り込んで造られたもので，後方部南西側が大きく崩壊しているが，墓坑は遺存しているとみられる。また，墓坑の下端ラインと槨の上端ラインが近接していること，槨の一部が堅い白い粘土であることから，粘土槨のような施設をもつ可能性が考えられる。

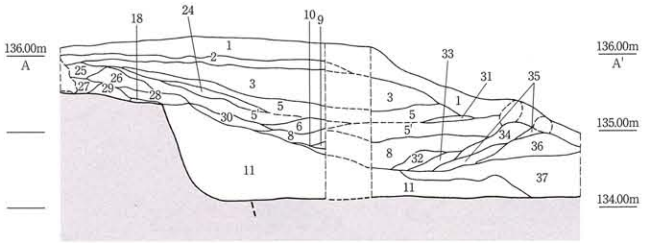


第８図　遺構実測図（１：100）
1. 9トレンチ　2. 10トレンチ

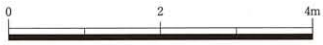




1. 7.5YR3/4暗褐色土
2. 7.5YR2/3極暗褐色シルト（炭化物3%混）
3. 7.5YR5/8明褐色シルト（炭化物3%混）
4. 7.5YR4/4～4/6褐色シルト（7.5YR4/2灰褐色粘質土20mm大3%混）
5. 7.5YR5/8明褐色シルト（10YR5/6黄褐色土・5YR4/8赤褐色土5～30mm大20%混,炭化物3%混）
5'. 7.5YR5/8明褐色シルト
6. 5YR5/6明赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘質土50%ブロック状混）
7. 7.5YR4/2～4/3灰褐色～褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘質土・7.5YR3/1黒褐色粘質土5～30mm大30%混）
8. 5YR4/8～5/8赤褐色～明赤褐色粘質シルト（5YR5/6明赤褐色粘質土20mm大30%混）
9. 5YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト（7.5YR2/2黒褐色シルト帯状に混）
10. 5YR4/8～5/8赤褐色～明赤褐色粘質シルト
11. 5YR赤褐色粘質シルト（10YR5/6黄褐色粘質土・5YR5/6明赤褐色粘質土5～20mm大40%混,炭化物3%混）
12. 7.5YR4/6～5/6褐色～明赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘質土20mm大5%混,炭化物1%混）
13. 7.5YR4/2灰褐色シルト（炭化物5%混）
14. 7.5YR5/8明褐色シルト（炭化物1%混）
15. 7.5YR4/6褐色シルト
16. 7.5YR4/6褐色シルト（5YR4/6赤褐色土20mm大5%混）
17. 5YR5/6明赤褐色粘質シルト
18. 5YR5/6～4/6明赤褐色～赤褐色シルト（炭化物3%混）
19. 5YR5/6～4/6明赤褐色～赤褐色シルト
20. 5YR5/8明赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色土20mm大10%混）
21. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色土3%ブロック状混）
22. 7.5YR4/6褐色シルト（炭化物3%混）
23. 5YR4/6～5/6赤褐色～明赤褐色粘質シルト
24. 7.5YR5/8明褐色シルト（7.5YR6/6橙色土20mm大10%混）
25. 5YR4/6赤褐色シルト
26. 5YR5/6明赤褐色シルト（炭化物3%混）
27. 5YR4/6～4/8赤褐色シルト
28. 7.5YR5/8～5/6明褐色粘質シルト
29. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（炭化物1%混）

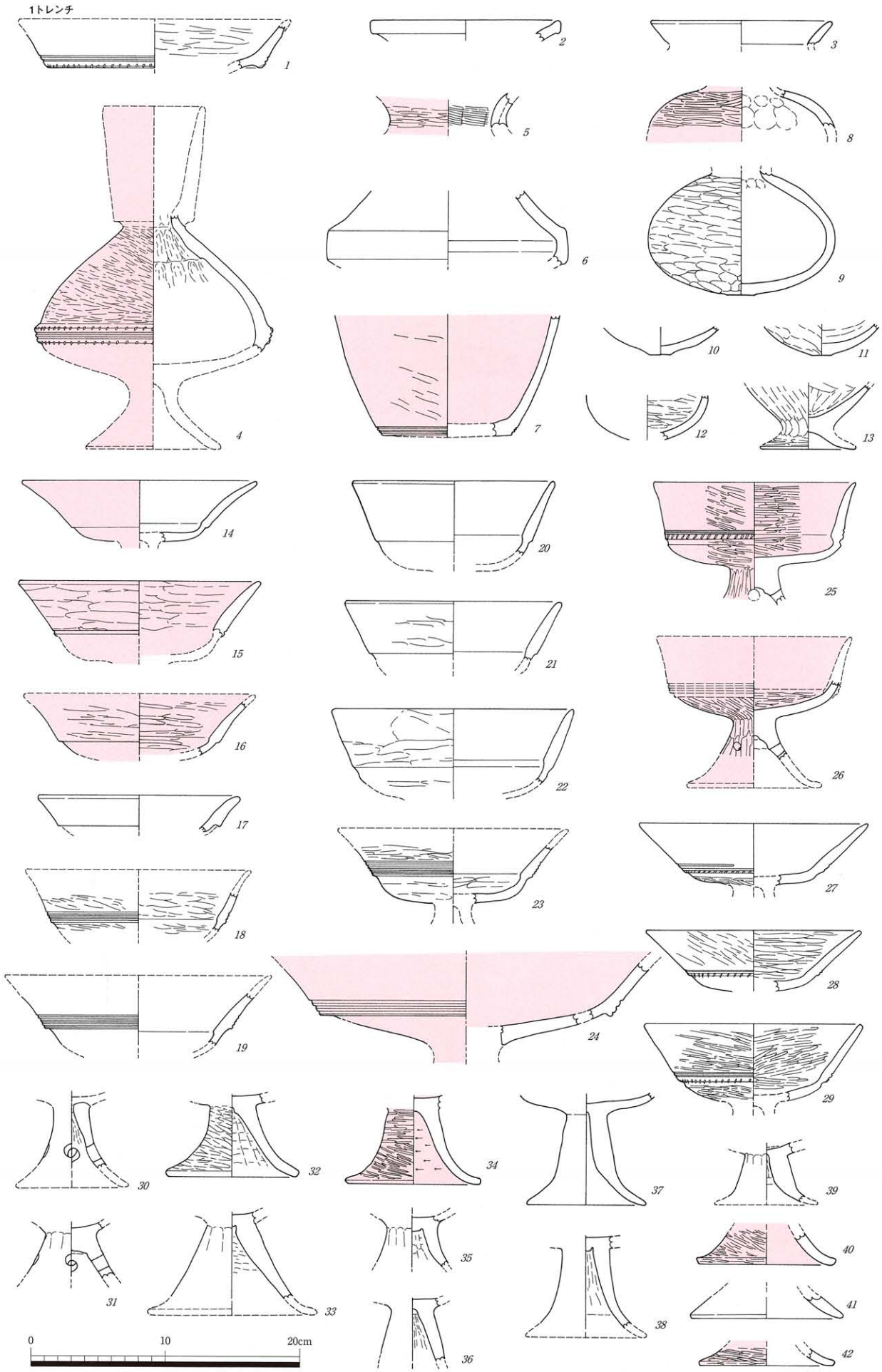


30. 5YR4/4にぶい赤褐色シルト（10YR5/6黄褐色粘質土40%ブロック状混,炭化物3%混）
31. 5YR4/8赤褐色シルト
32. 5YR5/6明赤褐色粘質シルト
33. 5YR5/8明赤褐色粘質シルト（炭化物1%混）
34. 5YR5/6～4/6明赤褐色～赤褐色粘質シルト（10YR 5/6黄褐色粘質土・7.5YR3/1黒褐色粘質土10～50mm大20%混）
35. 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルト50%ブロック状混,炭化物5%混）
36. 5YR4/6～4/8赤褐色シルト（5YR5/8明赤褐色土10mm大30%混）
37. 5YR4/3～4/4にぶい赤褐色粘質シルト（5YR5/8明赤褐色粘質土20mm大30%混,炭化物3%混）

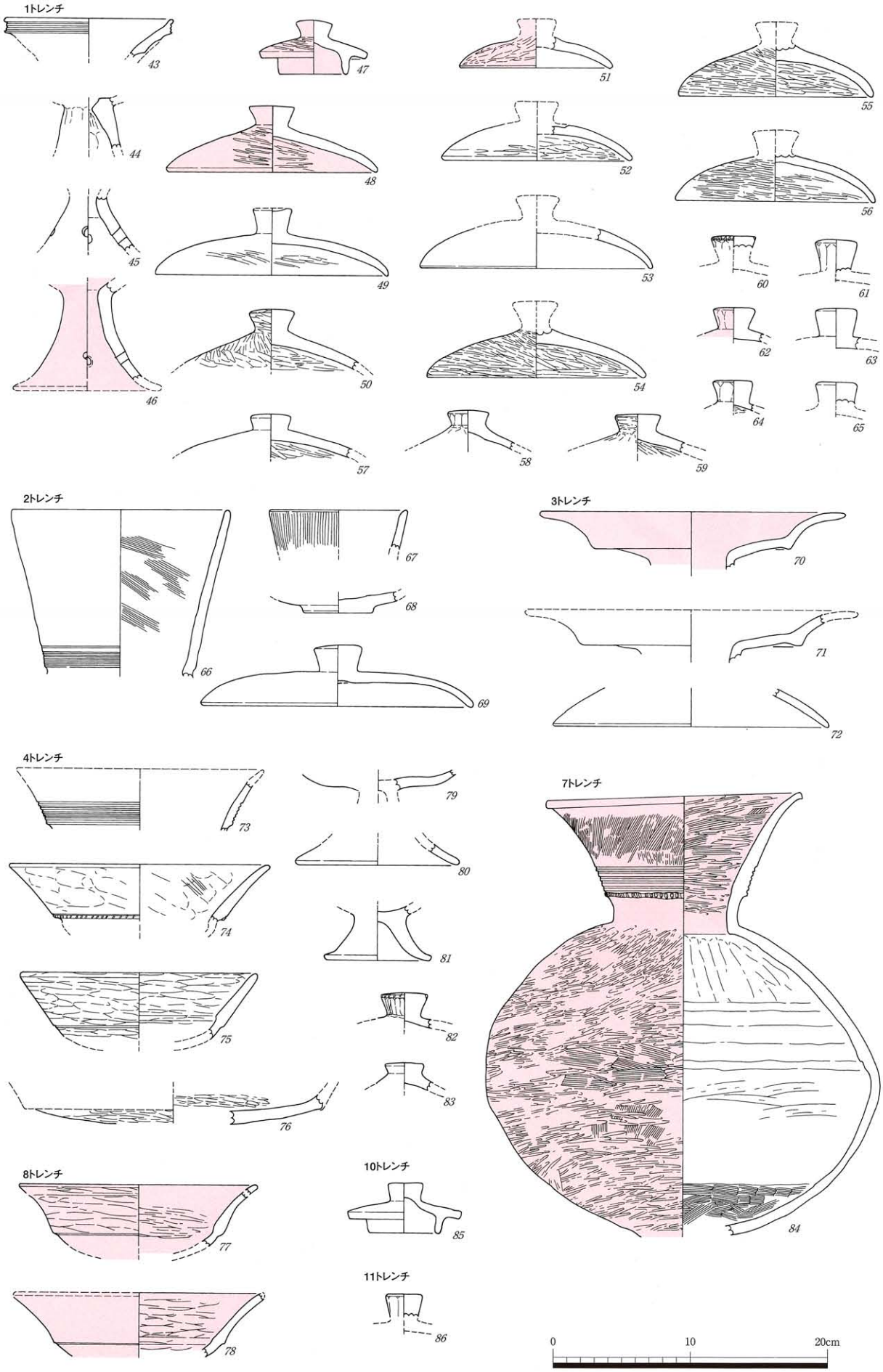


第9図　遺構実測図（1：100）

4トレンチ

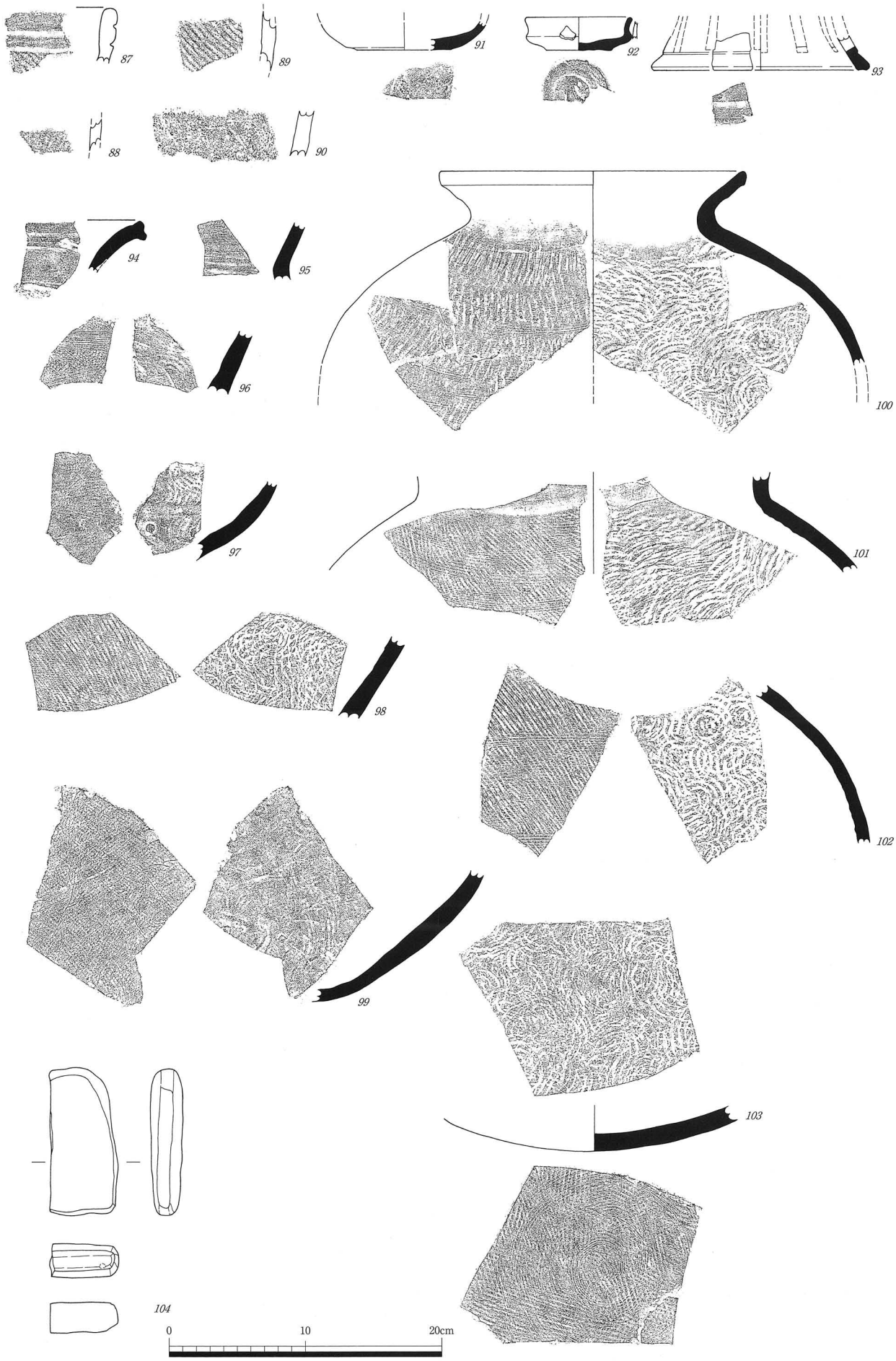


第10図　遺物実測図（1/4）
1トレンチ



第11図　遺物実測図（1/4）

1トレンチ（*43～65*）　2トレンチ（*66～69*）　3トレンチ（*70～72*）　4トレンチ（*73～76・79～83*）
7トレンチ（*84*）　8トレンチ（*77・78*）　10トレンチ（*85*）　11トレンチ（*86*）



第12図　遺物実測図（1/4）

1トレンチ（*96・104*）　3トレンチ（*94～95・97*）　4トレンチ（*91・101*）　5トレンチ（*92～93・99～100・102*）
6トレンチ（*87・89・98・103*）　7トレンチ（*90*）　10トレンチ（*88*）

D　遺　物（第10～12図）

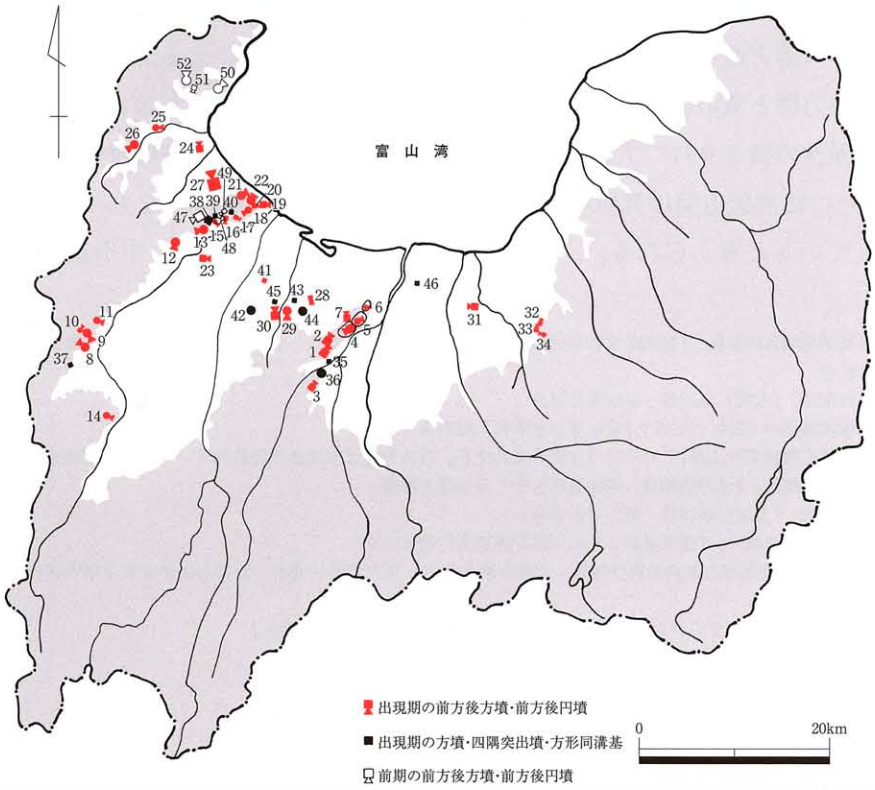
遺物は全トレンチから出土している。層位的には崩落土からの出土が多いが，1トレンチ・7トレンチの周溝内から多量に出土した以外は散発的である。以下，トレンチ毎に述べる。

1～65は1トレンチ出土。甕（1～3）・壺（4～13）・鉢・高杯（14～42）・器台（43～46）・蓋（47～65）がある。1は有段口縁の甕。口縁は外傾し，口縁帯には擬凹線文とキザミを施す。4は台付装飾壺。外面赤彩され，体部最大径の位置に擬凹線文とキザミを施す凸帯が巡る。7は内外面赤彩され，やや内湾気味に伸びる口縁部または体部下端に擬凹線文を施すもので，器種不明。12・13は壺または鉢。高杯杯部は椀形の深い杯底部に外反して伸びる口縁部をもつもので，口縁部が大きく外反するものと直立気味のものがある。口縁部は無文のもの，擬凹線文を施すもの，擬凹線文とキザミを施すものがある。脚部には比較的長く裾部で広がるものと，「八」字に開くものがあり，円孔をもつものもある。赤彩されたものは約30％を占める。器台は出土量が少ない。43は外反する受部をもち，受部端の狭い口縁帯に擬凹線文を施す。脚部には途中で屈曲して開くものと，「八」字に開くものがある。蓋にはかえりをもつもの，体部が直線的に伸びるもの，内湾して伸びるものがある。つまみには頂部が窪むもの，頂部が平坦なもの，頂部がやや膨らむものがあり，60は頂端部にキザミを施す。

66～69は2トレンチ出土。壺（66～68），蓋（69）がある。66は広口壺。長く発達した口縁部下端に擬凹線文を施す。69はつまみ頂部がやや膨らみ，体部が内湾して伸び，内外面ナデ調整である。

70～72は3トレンチ出土。二重口縁壺（70・71）と蓋（72）がある。70・71は強く外傾した有段口縁をもつもの。ほぼ水平な口縁部下半と外反する口縁部上半をもち，口縁部の有段部で接合している。

73～76・79～83は4トレンチ出土。高杯（73～76・79～81）と蓋（82・83）がある。高杯杯部は椀形の深い形態である。口縁部は外反し擬凹線文を施すものと，直線的に伸び無文のものがある。脚部は「八」字に開くもの。蓋はつまみ頂端部にキザミを施すものと，体部が直線的に伸びるものがある。



1 勅使塚古墳		後方	66m	
2 王塚古墳		後方	58m	
3 富崎千里古墳群	9号	後方	33.5m	
4 杉谷古墳群	1番塚	後方	56m	
	2番塚	方	18m	
	4号古墳	四隅突出	25m+10～20m	
	5号古墳	方	14m	
	6号古墳	方	45m×30m	
	7号古墳	方	10m×13m	
	8号古墳	方	35m×30m	
	9号古墳	方	28m×20m	
	10号古墳	方	20m×17m	
5 呉羽山丘陵古墳群	No.16	後円	38m	
	No.6	四隅突出	19m+5m	
	No.10	四隅突出	23.5m×22m	
	No.18	四隅突出	25m×23m	
	No.7	後方	39m	前期
6 杉坂古墳群	2号	後円？	22m	
	1号	方	18m	
	4号	方	12m	
	6号	方	15m	
	7号	方	9m	
7 西金屋長尾塚古墳		後方	30m	
8 関野古墳群	1号	後円	65m	
9 谷内古墳群	16号	後円	47.6m	
10 谷内古墳群	17号	後方	29m	
11 天狗山古墳群	6号	後円	30m	
12 男穀古墳群	1号	後円	58m	
13 板屋谷内A古墳群	1号	後円	51m	
14 安居寺古墳群	1号	後円	33m	
15 須田不動山古墳群	2号	後円	20m	
16 東海老坂ムカイ山古墳群	1号	後方	28m	
17 鳥越古墳群	C1号	後方	21m	
18 東上野1古墳群	1号	後円	33.4m	
19 国分山古墳群	K1号	後方	39m	
20 国分山古墳群	K2号	後方	28m	
21 桜谷古墳群	1号	後円	62m	
22 桜谷古墳群	2号	後円	50m	
23 石塚古墳群	2号	後方	30m	
24 朝日洞山古墳群	1号	後方	33m	
25 中村天場山古墳		後円	32m	
26 日名田古墳群	1号	後円	42.2m	
27 柳田布尾山古墳		後方	107.5m	
28 一ツ山古墳群	1号	後方？	25m	
29 変電所西古墳		後円	42m	
30 五歩一古墳群		後方	44m	
31 竹内天神堂古墳		後方	38m	
32 柿沢古墳群	5号墳	後方	22.4m	
33 柿沢古墳群	6号墳	後方	21.8m	
34 柿沢古墳群	7号墳	後円	33.4m	
35 六治古墳		四隅突出	23.5m	
36 富崎墳墓群	1号墓	四隅突出	17m	
36 富崎墳墓群	2号墓	方		
36 富崎墳墓群	3号墓	四隅突出？	22m	
37 北一墳墓群	1号	四隅突出？	12m×13.5m	
38 須田不動山古墳群	1号	方	30m×28m	
39 東海老坂ダイラ古墳群	2号	四隅突出？	17m×16m	
40 鳥越古墳群	A3号	方	18m×18m	
41 二口油免1号墳		方	(19m)	
42 畢田新道跡古墳群	1号	方	25m	
43 囲山遺跡	4号	方形周溝墓	17m～18m	
44 二ツ山古墳群	3号	方	10m	
45 流通業務団地内No1遺跡	SX03	方形周溝墓？		
46 ちょうちょう塚古墳		方	22m×21m	
47 五十里1号墳		後方	43m	前期
48 西海老坂小田谷内古墳群	1号	後円	40m	前期
49 二上古墳群	2号	後方	18m	前期
50 阿尾島田古墳群	A1号	後円	72m	前期
51 稲積オオヤチ古墳群	A7号	後方	23m	前期
52 稲積オオヤチ古墳群	A1号	後円	47m	前期

第13図　富山県内の出現期～前期古墳位置図

84は７トレンチ出土。有段口縁をもち，赤彩された壺。発達して外反する口縁部に擬凹線文をもち，下端にキザミを施す。口縁部内外面はヘラミガキ調整，体部外面はハケ調整後ヘラミガキ調整，内面はヘラケズリ調整，ハケ調整である。底部は打ち欠いて穿孔している。

77・78は８トレンチ出土の高杯。内外面赤彩，椀形の深い杯底部に外反して伸びる口縁部をもつ。

85は10トレンチ出土の蓋。かえりをもち，つまみ頂部が平坦である。

86は11トレンチ出土の蓋のつまみ。

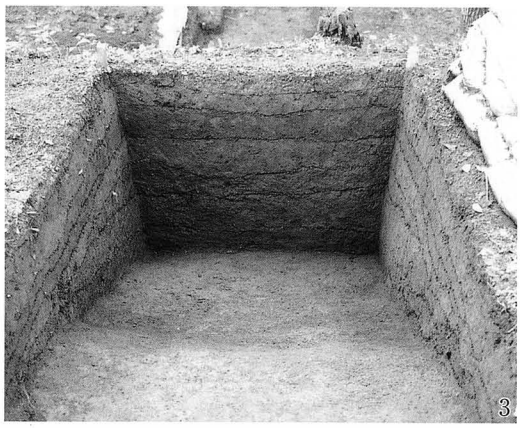
その他の時期の遺物には縄文土器（87～90），須恵器（91～103），石器（104）がある。縄文土器は小破片のため時期不明。須恵器には杯，円面硯，甕があり，時期は８世紀代である。

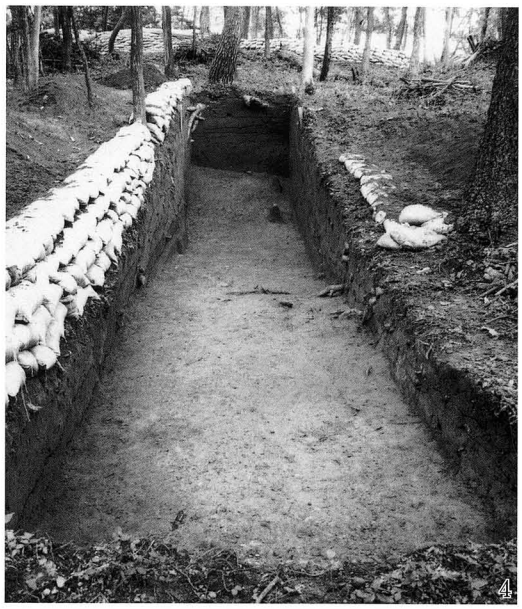
以上，出土した遺物のほとんどが在来系の形態であり，調整・加飾（擬凹線文やキザミ等）も弥生時代末の様相を色濃く残す。外来系の土器は畿内系の二重口縁壺のみで，東海系の壺・高杯はみられない。限られた調査面積のためか器種構成には偏りがみられ，蓋の出土量が突出し，次いで高杯となる。多くは調整も丁寧で，約25％は赤彩され，精製品が多い。

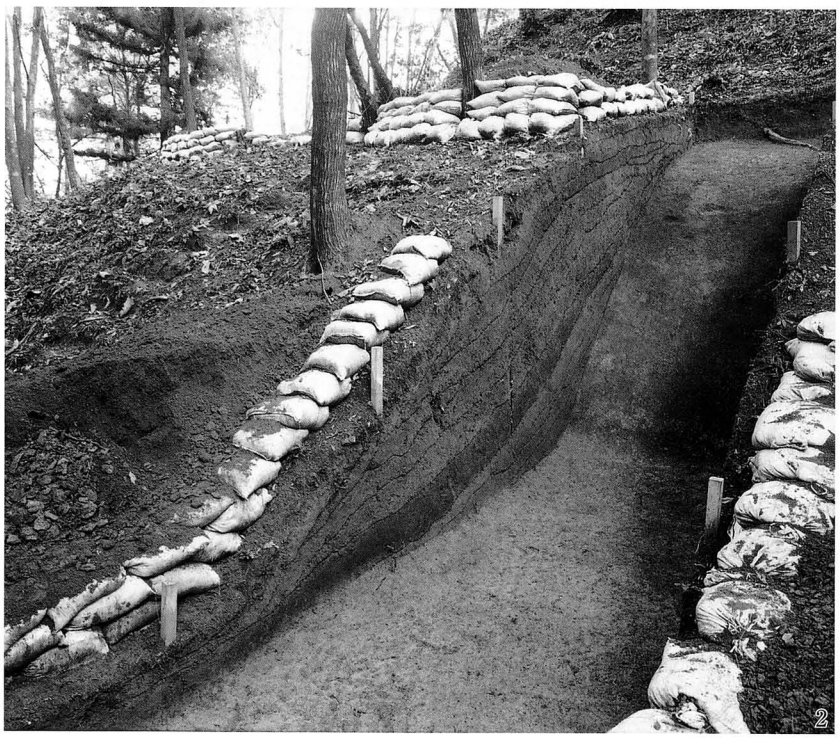
E　まとめ

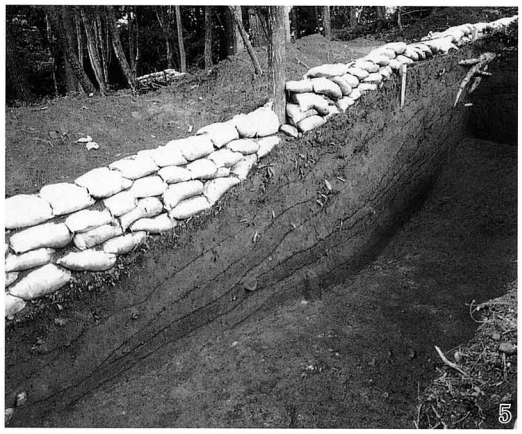
勅使塚古墳は全長66ｍの大型前方後方墳で，平野との比高約100ｍの丘陵尾根上に位置する。出土遺物の時期は，古府クルビ式併行期で，在来系の土器様相を色濃く残す。越中に外来系土器が波及するのは白江式であるが，外来系の土器を殆ど含まない勅使塚古墳の土器様相は独自といえ，地域や遺跡毎に様相が異なる可能性が高い。定型化した前方後方墳としては県内最古級（３世紀末）と考えられ，勅使塚古墳周辺には先行する法仏式～白江式期の四隅突出型墳丘墓を中心とした千坊山遺跡群，約３㎞離れて杉谷古墳群が存在する。千坊山遺跡群では月影Ⅱ式期に墳丘規模の大型化，前方後方形墳丘墓・方形墳丘墓など墳形の多様化，白江式～古府クルビ式期には丘陵尾根上に大型前方後方墳，丘陵辺縁部に小型前方後方墳・方墳・円墳で構成される墓域が造営され，より広域の重層的な序列化が進む〔婦中町2002〕。越中４郡における古墳出現期～前期の古墳は，前方後方墳が射水郡の二上丘陵周辺，婦負郡の射水丘陵に多く，砺波郡では前方後円墳が卓越する。これは日本列島における西日本の前方後円墳卓越地帯と東日本の前方後方墳卓越地帯が対峙する様相の縮図ともいえる。これについて宇野隆夫氏は西の邪馬台国勢力圏と東の狗奴国勢力圏の対峙から，古府クルビ式における前方後円墳と前方後方墳の大型化と共通性の強まりは二大勢力の連合の結果とし，この時点を古墳時代の始まりと評価している〔宇野1999〕。勅使塚古墳は東海の影響を受けた墳形と畿内系の土器をもつことから，二大勢力の融合を表わしていると考えられる。（中川道子）

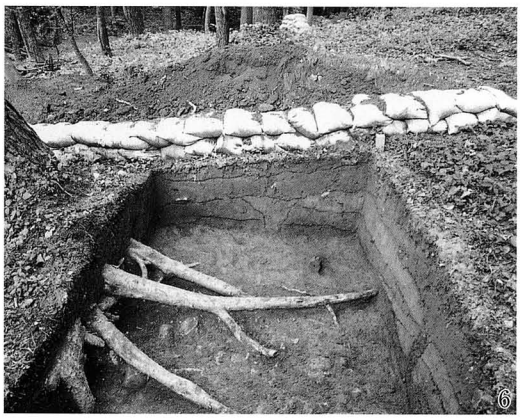
引用・参考文献
宇野隆夫　1999　「富山平野の古墳の動向と地域間関係の変化」『富山県考古学会創立50周年記念シンポジウム　富山平野の出現期古墳《発表要旨・資料集》』富山考古学会
岡本淳一郎　1991　「婦中町富崎地内採集の遺物」『大境』第13号　富山考古学会
岡本淳一郎他　1999　「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』紀要第２号
小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器について」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第32号　石川考古学研究会
高橋浩二　1995　「北陸における古墳出現期の社会構造」『考古学雑誌』第80巻第３号　日本考古學會
高橋浩二　1995　「越中における古墳出現期の様相」『大境』第17号　富山考古学会
田嶋明人　1986　「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
富山大学人文学部考古学研究室　1990　『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告―北陸の前方後円・後方墳の一考察―』富山大学考古学研究報告第４冊
富山考古学会　1999　『富山県考古学会創立50周年記念シンポジウム　富山平野の出現期古墳《発表要旨・資料集》』
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　『東日本における古墳出現過程の再検討』
氷見市教育委員会　2000　『柳田布尾山古墳　第１次・第２次発掘調査の成果』
婦中町教育委員会　2002　『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告書』
堀　大介　2003　「月影式の成立と終焉」『古墳出現期の土師器と実年代』（財）大阪府文化財センター
まつおか古代フェスティバル実行委員会　1997　『発掘された北陸の古墳報告会資料集』
谷内尾晋司　1983　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会々誌第26号　石川考古学研究会
八尾町教育委員会　1997　『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１』





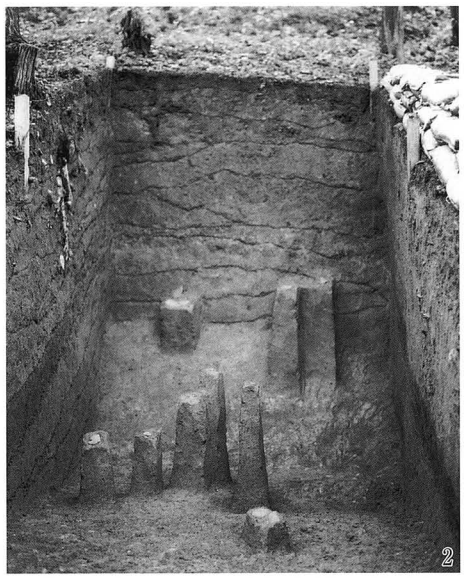


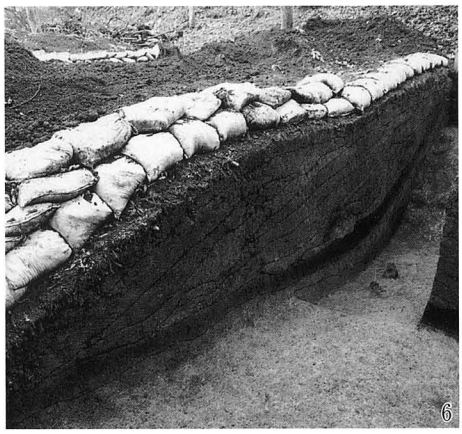




図版1　後方部

1. 1トレンチ（北西から）　2. 1トレンチ 断面（西から）　3. 1トレンチ 断面（南東から）
4. 2トレンチ（南西から）　5. 2トレンチ 断面（南から）　6. 2トレンチ上 断面（南東から）



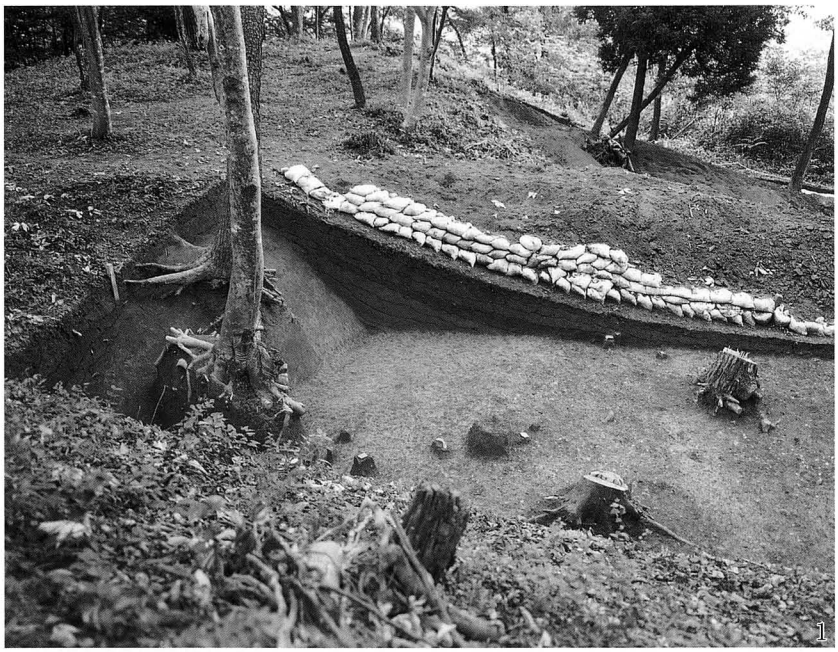
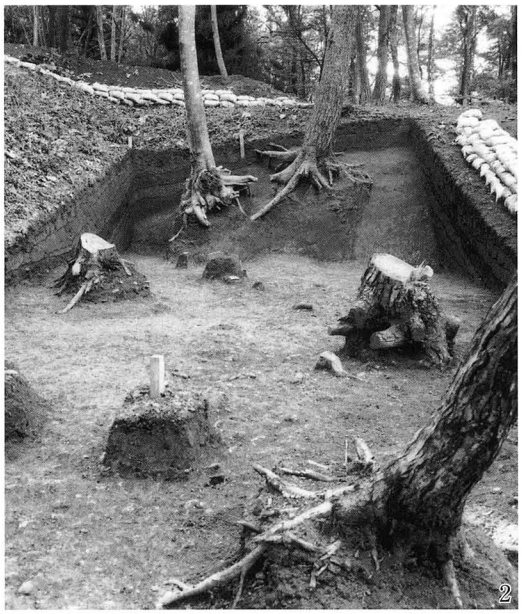


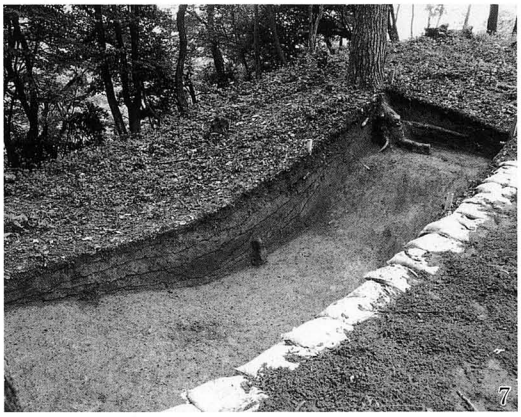
図版２　後方部・くびれ部

1. 3トレンチ（南東から）　2. 3トレンチ遺物出土状況　3. 6トレンチ（北東から）　4. 6トレンチ上拡張区 くびれ部（北東から）　5. 6トレンチ 断面（北西から）　6. 11トレンチ 断面（北から）

図版３　後方部

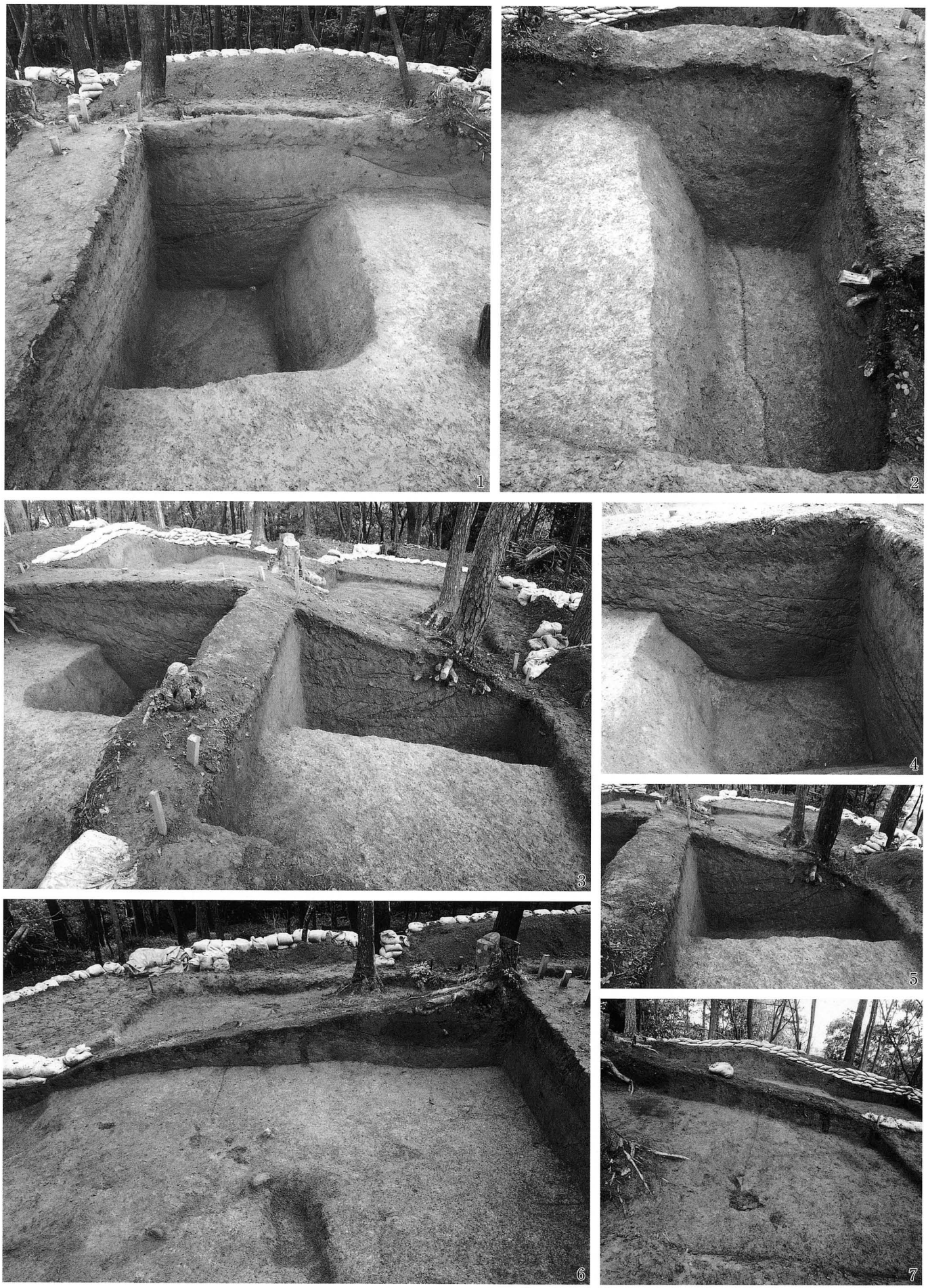
1. 7トレンチ上 断面（東から）　2. 7トレンチ上 断面（南から）　3. 7トレンチ 後方部コーナー（北西から）
4. 7トレンチ 遺物出土状況（西から）　5. 10トレンチ コーナー（北から）
6. 10トレンチ コーナー（南西から）　7. 10トレンチ 断面（西から）



図版４　前方部

1. 5トレンチ（南から）　2. 5トレンチ（東から）　3. 8トレンチ（南東から）　4. 8トレンチ　断面（南東から）
5. 8トレンチ 断面（北東から）　6. 9トレンチ（北西から）　7. 9トレンチ 周溝（南西から）

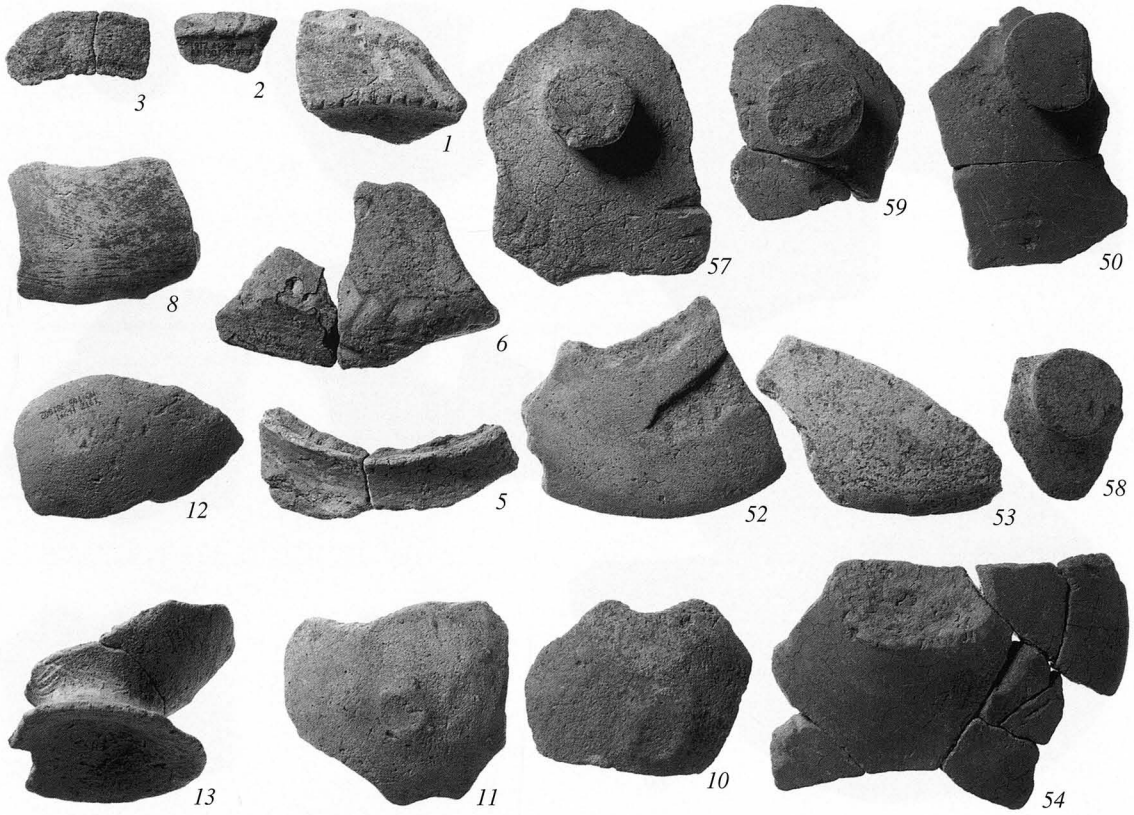


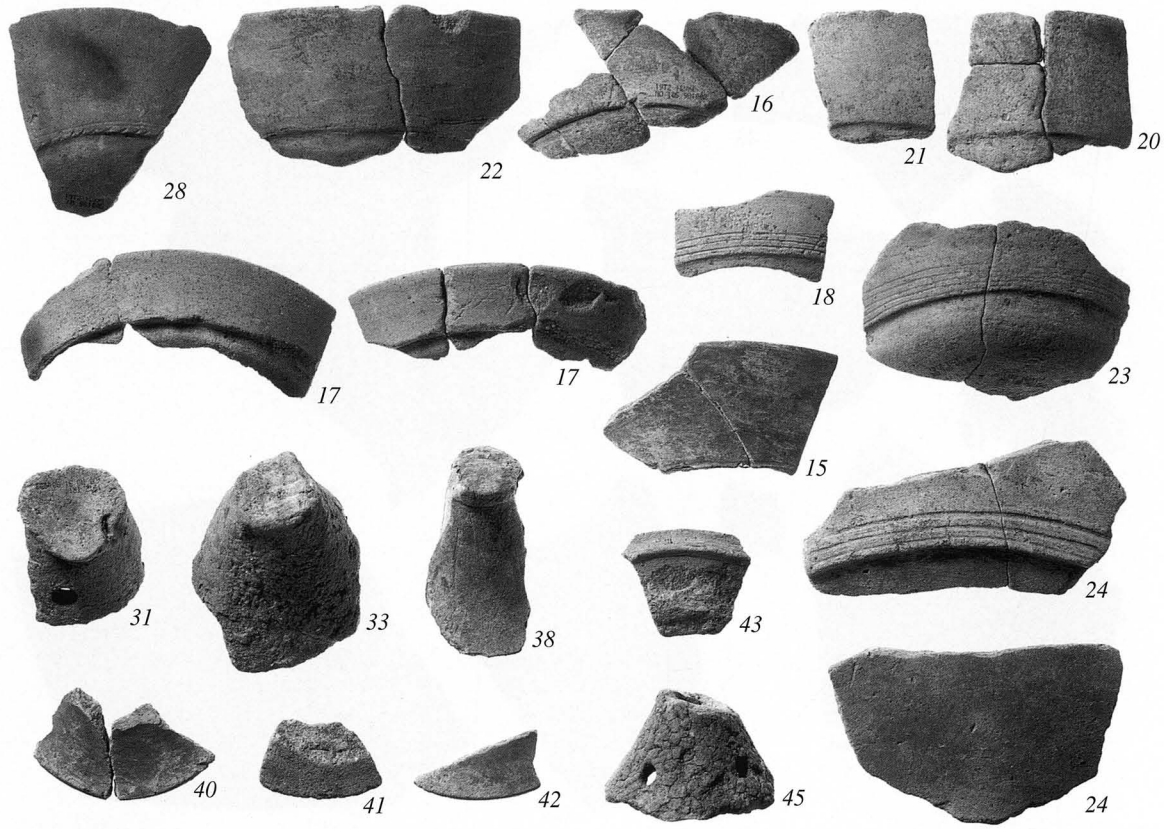
図版５　墓坑

1. 槨検出（北東から）　2. 槨検出（南西から）　3.～5. 4トレンチ 断面（北東から）　6. 墓坑検出（北東から）
7. 墓坑検出（南西から）

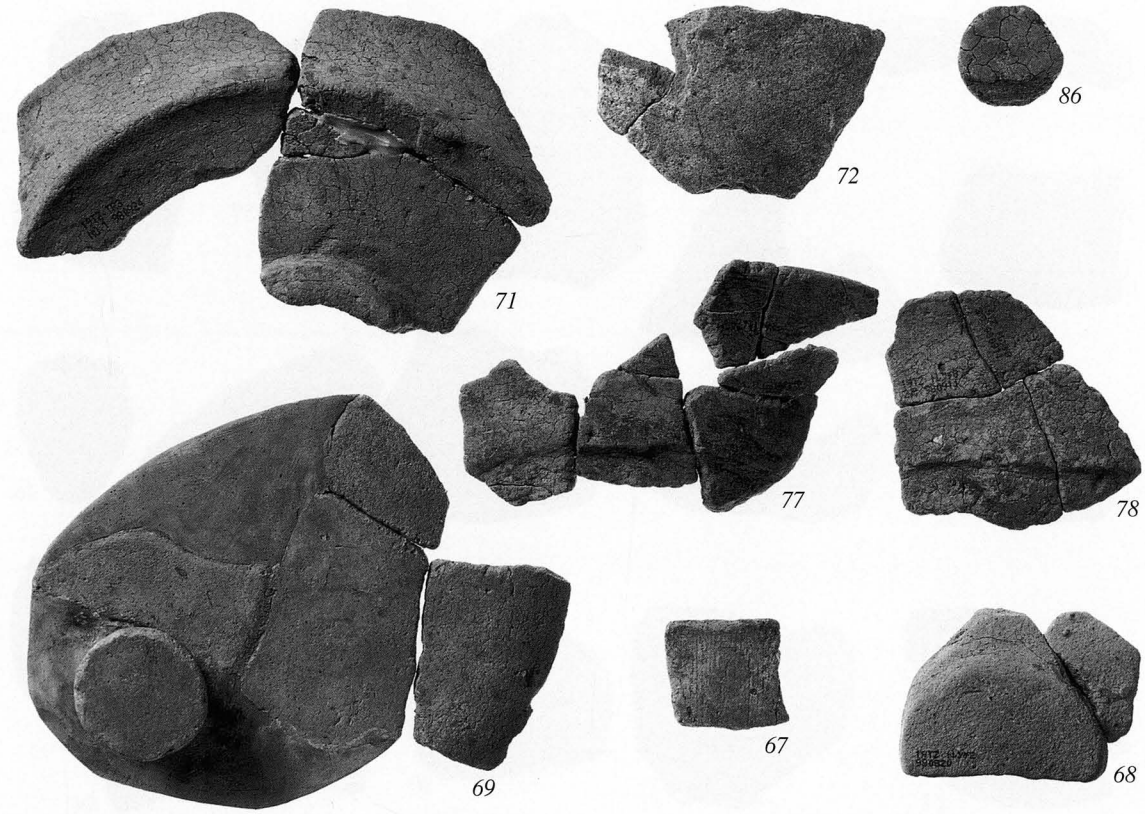
図版6　出土遺物

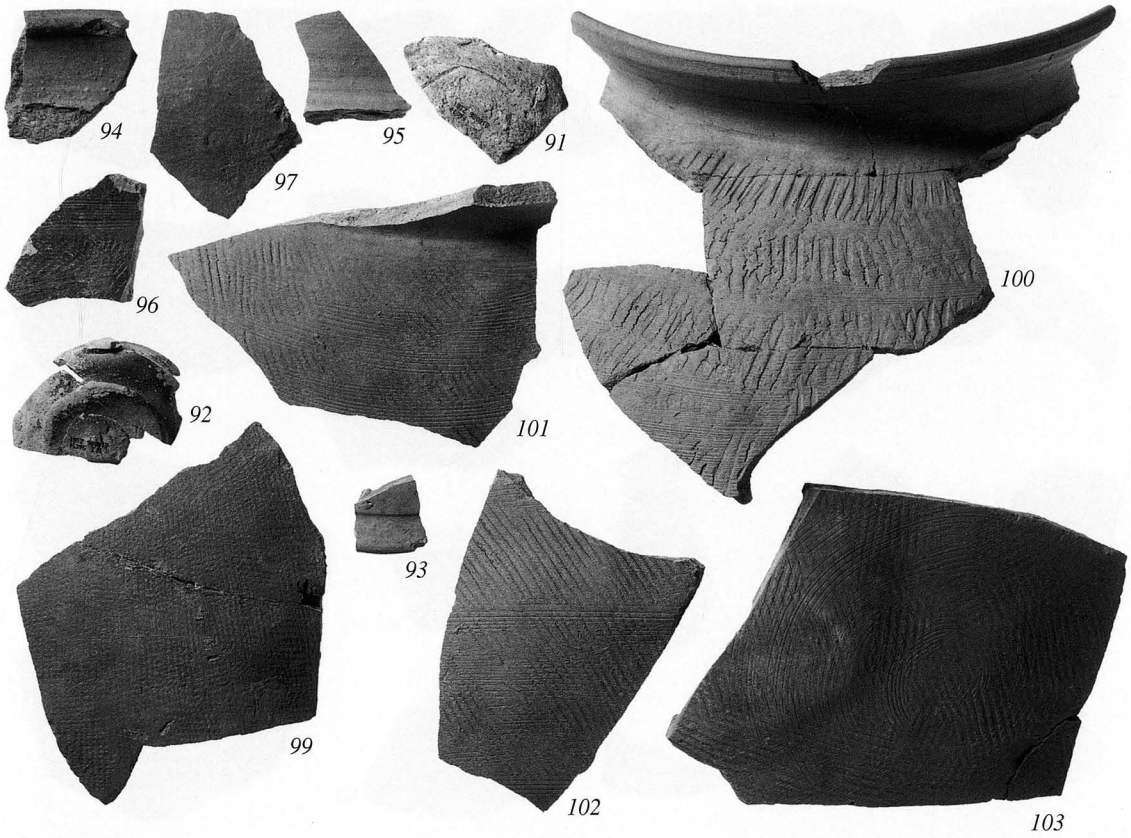
1トレンチ（*47～49*）　4トレンチ（*73～76・79・80・82・83*）　7トレンチ（*84*）　10トレンチ（*85*）





図版７　出土遺物
1トレンチ





図版８　出土遺物

1トレンチ（*96*）　2トレンチ（*68・69*）　3トレンチ（*71・72・94・95・97*）　4トレンチ（*91・101*）
5トレンチ（*92・93・99・100*）　6トレンチ（*102・103*）　7トレンチ（*67*）　8トレンチ（*77・78*）
11トレンチ（*44*）

2　永代遺跡

A　遺跡の概要

遺跡は，中新川郡上市町野島地内で上市川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は100m程で，川との比高差は約20mである。周辺には右岸に野島遺跡（縄文前期～後期），野島大門遺跡（縄文中期）などがある。また，対岸には玉作で知られる極楽寺遺跡（縄文前期・中期）や県内で初めて旧石器時代の石器が確認された眼目新丸山遺跡（旧石器，縄文前期・中期），丸山Ａ遺跡（縄文中期～晩期）などが位置している（第14図）。眼目新丸山遺跡では，昭和58年に町道拡幅に伴う発掘調査が実施され，発掘調査で初めて旧石器時代の東山系の剥片石器が発見され，注目された。

調査は段丘上に東西に平行する幅２ｍのトレンチを設け，遺跡の遺存状態や遺構の広がりを確認しながら南北に直交するトレンチを設けた（第15図）。その結果，１トレンチで３棟，３トレンチで１棟，７トレンチで１棟，計５棟の竪穴住居を検出した。また，４トレンチ北側では，性格不明の焼土を３カ所確認した。この確認調査の結果を基に２カ所に拡張区を設け，２棟の住居を調査した。この場所は，上市町教育委員会が昭和59年に広野用水の付替えのために発掘調査を行い，４棟の竪穴住居がみつかった部分の北側に当たる。そのため，今回の調査では10番台の遺構番号を使用した。

基本層序は，Ⅰ層；黒色土（耕作土），Ⅱ層；黒色土，Ⅲ層；暗黒褐色土，Ⅳ層；黄褐色土（地山）となり，包含層はⅡ・Ⅲ層である。

B　遺　構

調査で発掘した竪穴住居は11・12号の２棟で，13号はプランの確認のみ行った。

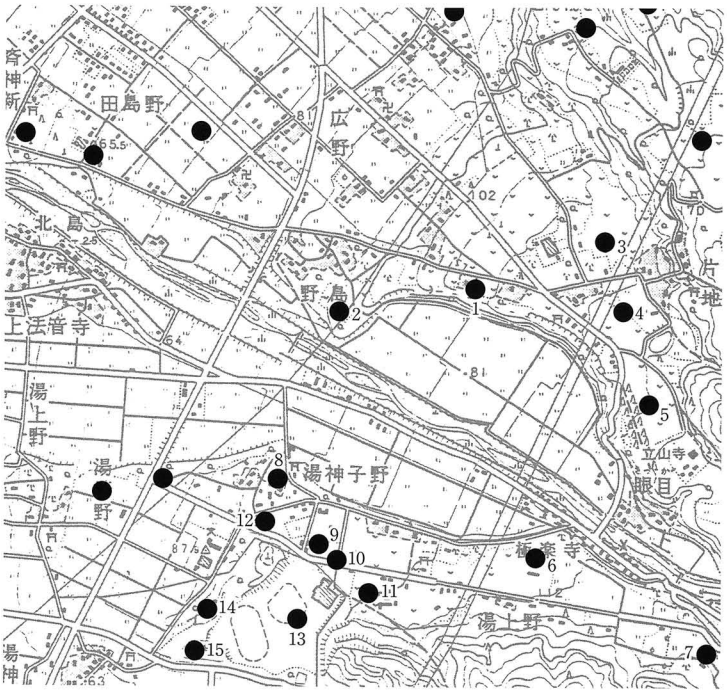
11号住居（ＳＩ11，第16図）　平面形は長軸7.5m，短軸4.5mの楕円形で，北側に漏斗状の穴（直径１ｍ，深さ１ｍ）を持つ。柱は８から９本と考えられ，２基の地床炉が設けられる。炉の周りの床は，柱の間の２ｍほどが固く締まっている。炉はそれぞれ50cmと30cmの規模で３～５cm掘り窪められ，内面は良く焼けている。住居は，Ⅱ層から掘られており，推定される深さは35cm以上で，地山への掘り込みは10cm程度となっている。遺物の多くは埋土の１層からの出土で，第17図３が床面，４が漏斗状穴・床面からの出土である。

12号住居（ＳＩ12，第16図）　平面形は長軸4.9m，短軸4.1mの楕円形で，南側に漏斗状の穴（直径0.9～1.3m，深さ56cm）を持つ。南側の一部は風倒木により撹乱を受けており，はっきりと確認できないが６本柱と考えられ，一部の柱穴に重複が見られることから建て替えが行われた可能性がある。また，炉の周りは１ｍほどの範囲が固く締まっている。炉は，２個の河原石を中に敷き，５個の石を組み合わせて作る小型の石組炉である。遺物は床面にはほとんど見られず，埋土から第17図14が出土している。住居の掘り込み面は，Ⅱ層からで，深さは32cmほど確認できる。

C　遺　物（第17～22図）

土器には縄文中期前葉～中葉にかけてのものが見られるが，主体は前葉にある。器形は口縁部がキャリパー状になる１・６・14・15・41～48など，胴下半部が膨らみ緩く外反する２・４・８・９・17・32～40・52，直線的に外反する３・５・11・19・58～60・68，括れを持って外反する10・25，胴下半部が膨らみ口縁が内屈する21などが一般的な形である。１は胴上部に文様帯を持ち，口縁部は拳状の突起と入り字状の突起を交互に付け，半裁竹管による区画内に格子目文様を施す。文様は同じ構成を４度繰り返す。２は表裏２カ所に渦巻く隆帯を口縁と底部から付け，Ｂ字状の文様を器面に施す。文様は２単位。３・５・19は口縁に入り字状の突起が付く深鉢。４は爪形文，無文帯，爪形文を交互

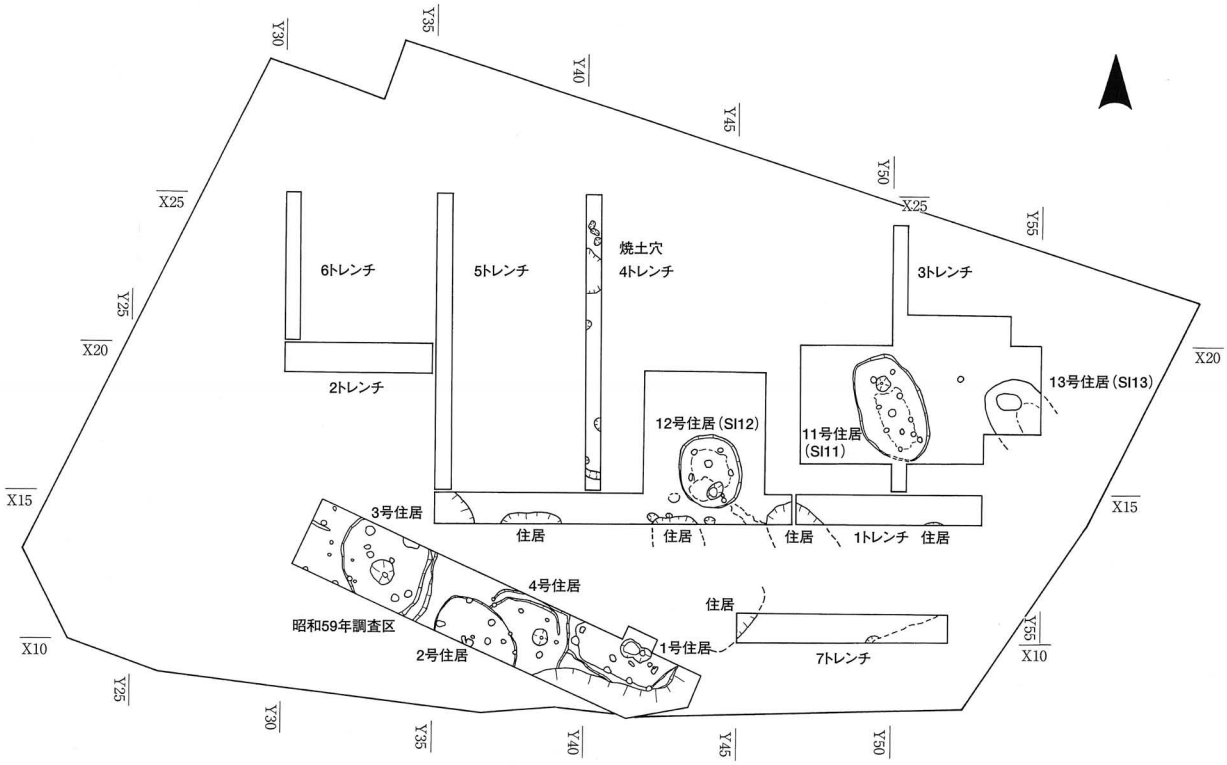
に施し，胴下半部に縄文を施す深鉢。6は弧線状に半隆起帯を巡らせ，三叉文や半裁竹管文を充填する深鉢で，口縁部の屈曲が強い。8・9・15は胴上部に蓮華文や無文帯を設け，下半部にB字状文を施す。8はSI11とSI13から破片が出土している。また，8の文様構成は2単位で，反対の文様は口縁の半裁竹管が1条多い5条となる。7・12・53～57は信州系の土器で，新道式との関係が考えられるもので，鋸歯状や楕円形の文様の中を連続して刻む手法が特徴的である。16も同様に信州系と考えられる。14は口縁部に入り字状の突起の付けられるもので，無文帯は8同様刻まれる。胴上部には



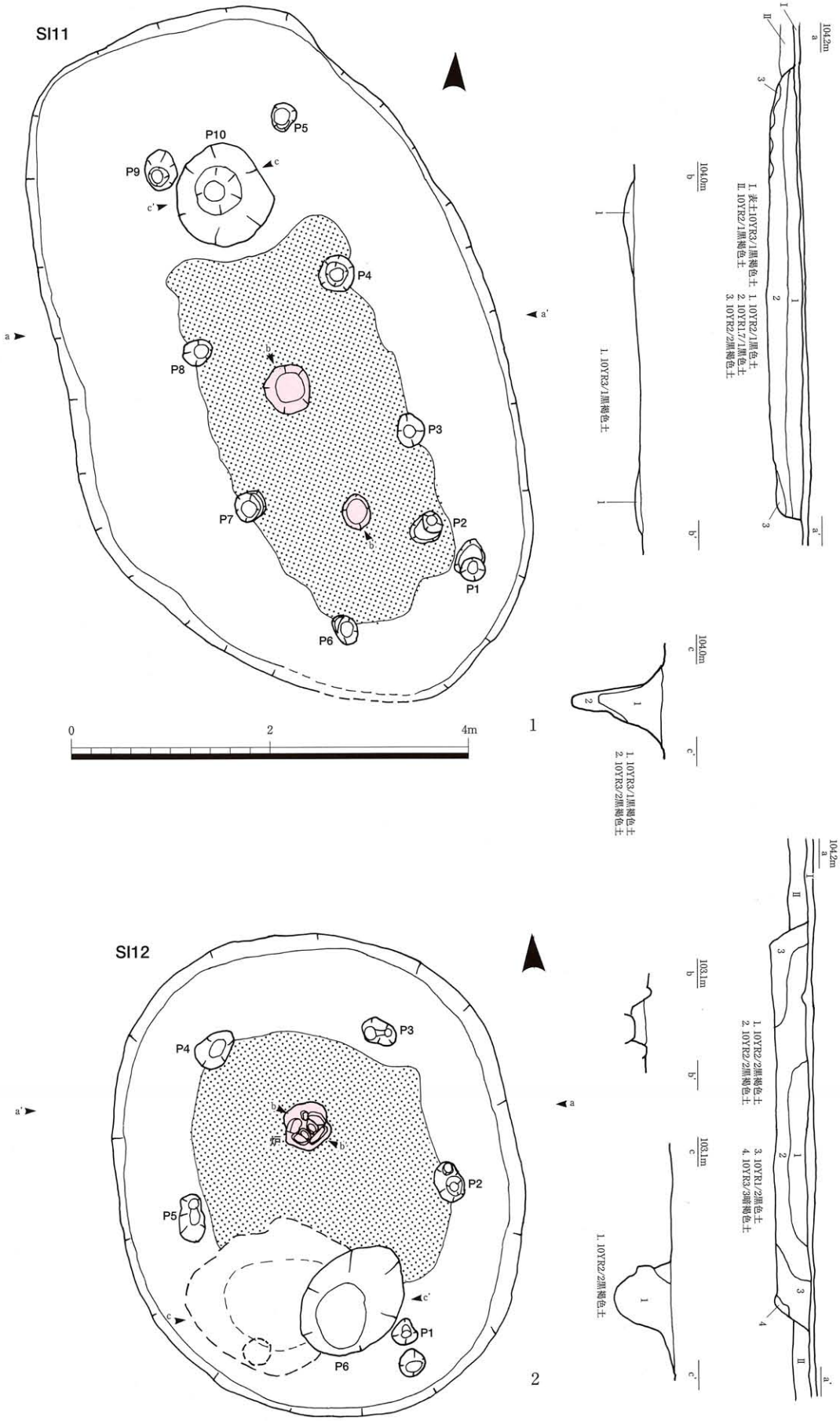
第14図　周辺の遺跡（1：25,000）

	遺跡名	時　代
1	永代遺跡	縄文中期
2	野島遺跡	縄文前～後期
3	永代野遺跡	縄文晩期
4	片地遺跡	縄文
5	野島大門遺跡	縄文中期
6	極楽寺遺跡	縄文前・中期
7	上極楽寺遺跡	縄文前・中期
8	丸山A遺跡	縄文中～晩期
9	眼目新丸山遺跡	旧石器・縄文
10	丸山C遺跡	縄文
11	丸山D遺跡	縄文
12	丸山E遺跡	縄文晩期
13	丸山山頂遺跡	不明
14	堤谷横山窯跡	奈良
15	堤谷ギス谷遺跡	旧石器

第2表　遺跡一覧



第15図　調査区及び遺構図（1：500）



第16図　遺構実測図（1：60）

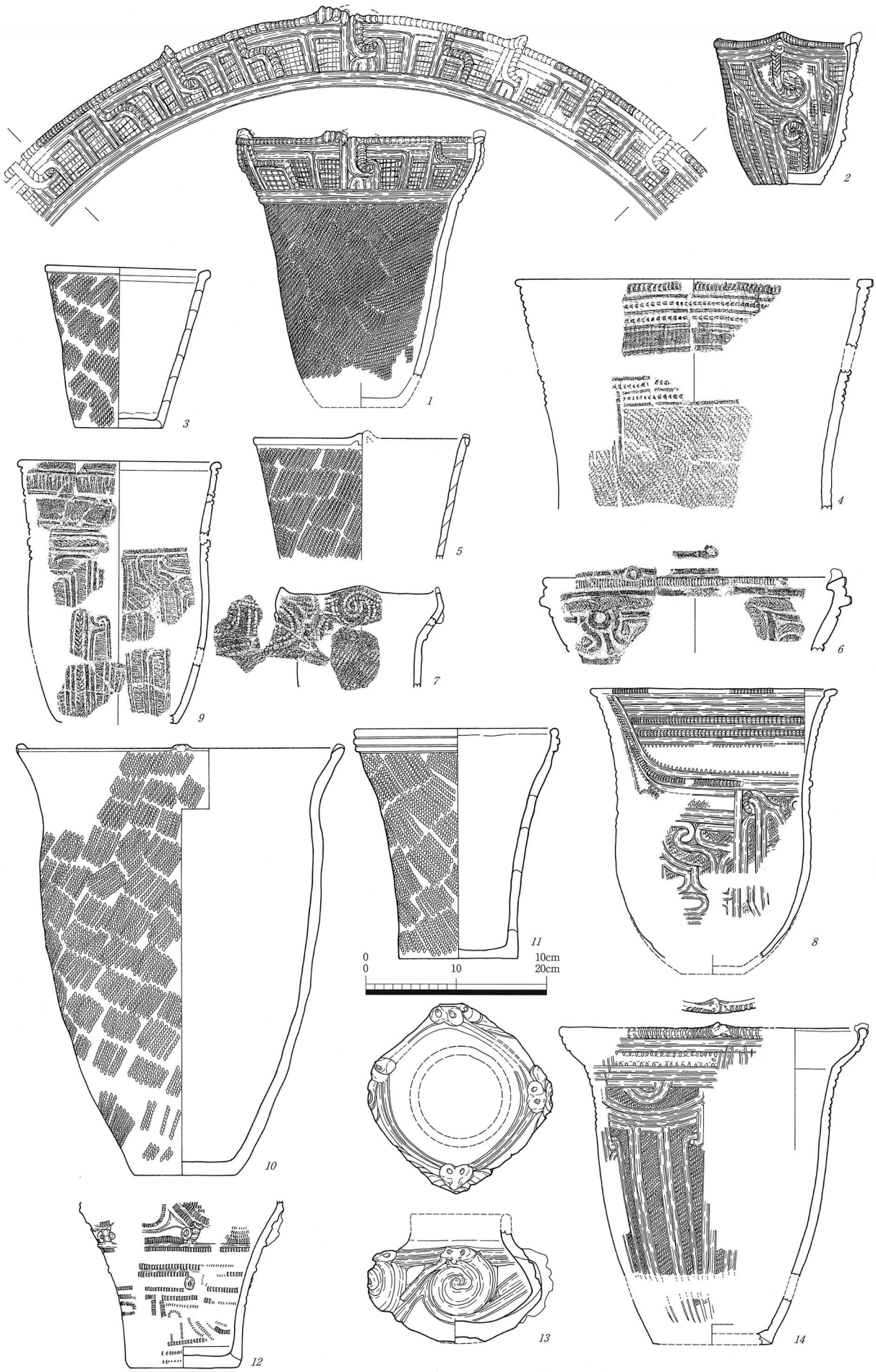
1. SI11　2. SI12

半裁竹管で弧文を描き，胴下半は蓮華文風に仕上げている。15・18は波状口縁の深鉢で波頂部は握り拳状に作られる。口縁下は半裁竹管で区画した無文帯を配し刻みを施し，胴部から波頂部に向かって渦巻く隆帯が見られる。比較的隆帯の発達した個体である。15はキャリパー形がしっかりし，文様が細かく丁寧に施されている。また，竹管文が細く他の土器とは異なっている。10・25は大型の深鉢で，口縁部に入り字状の突起を持つ。器面は全面に縄文が施される。特に25では胴下半がＬＲの縄文で，胴上半の半分は無節のｒの縄を施している。新崎式期の文様の２単位を意識したものだろうか。またこの土器の内面には漆状の物質が塗られている。26・61～66は口縁部に押圧縄文を施す深鉢で新崎式の特徴となっている。49・50は有文系の波状口縁深鉢。20は口縁がくの字に折れ，外反する台付深鉢。22は胴部に羽状縄文を施す浅鉢。このような特徴は新崎式の古い時期に見られる。23・24は素文系の浅鉢で，直線的に外反する23と内屈する24がある。71～73は有文系の浅鉢。74・75は口径10cmほどの小型土器で，ヘラで削る74と縄文を施す75がある。有孔鍔付土器は５点３個体が確認できる。86・87は胴部片で幅広な隆起帯文様が施されている。88は同一個体片。13は小型の鍔付土器で，ＳＩ13の埋土から出土している。胴部には連続する渦巻き文を配し，渦上に動物を意匠した文様が付けられている。

76～81は天神山式土器。一般的に渦巻き文様が特徴であるが，ここでは弧線状に貼り付けた隆帯と，半裁竹管文を主文様としている例が多くある。77は小型土器。82～85は，古府式土器。文様はヘラやクシ状の工具で刻んでいる。84は横方向に撚り糸を施す例で，内面がよく磨かれていることから浅鉢の胴部片と考えられる。82は東北の大木式土器の影響を受けた土器と考えられ，天神山式から古府式にかけて県内でもよく見られる。

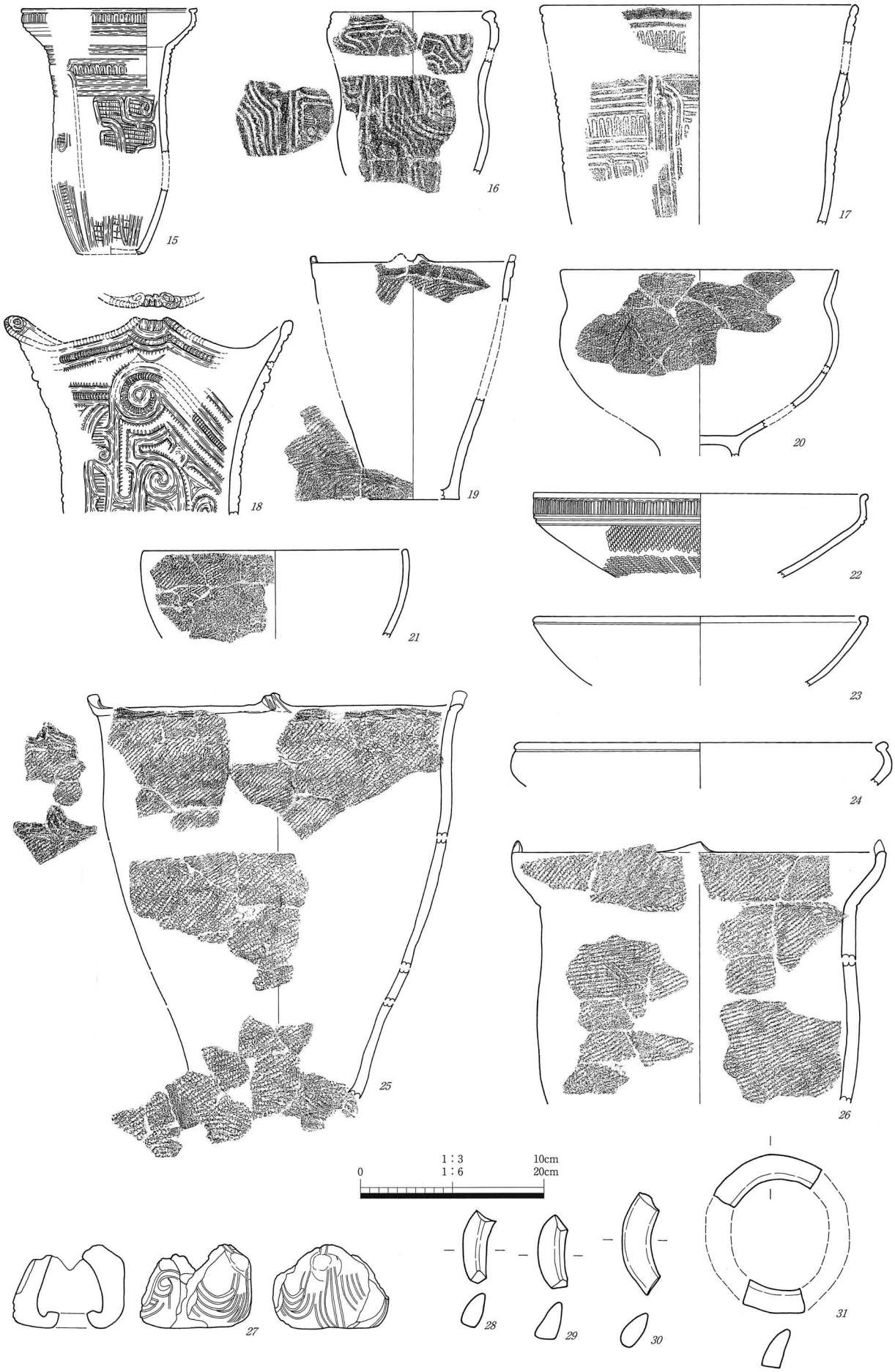
土製品には土偶と腕輪状土製品がある。土偶は中空土偶の腹の部分で，足は付けられていないが，底の部分には焼成前に穴が穿たれている。また尻は平に作られ，腹から尻にかけて数条の半裁竹管文が施されている。腕輪形土製品は５点，４個体分あり，径は８cmほどの楕円形で断面は三角形で内側が薄くなっている。文様は付けられていない。

石器には旧石器時代のナイフ形石器，縄文時代の石鏃・石匙・石錘・磨製石斧・打製石斧・くぼみ石・擦切具・すり石・砥石・石皿がある。中でも擦切具が多く見られる。89は東山系のナイフ形石器で，刃部と基部に押圧剥離による刃潰しを行う。また打点に打面調整を行う。石材は珪質頁岩で包含層出土。石鏃は４点みられ何れも凹基系鏃で，黒曜石を使用している。94は小型の石匙。95～98は打欠石錘で98は大きい。99・100は定角式磨製石斧で刃部が欠損している。99は刃部に再加工痕がみられる。101～105は打製石斧で泥岩を使用しており全体に薄く仕上げている。106・107はくぼみ石で両面にくぼみが付けられ，すり石としても使われている。このような使用例は多く半数以上にみられる。108は断面三角形の河原石の一辺を利用するすり石で県内では前期から中期前葉に比較的多くみられる。109・110は擦切石斧の未製品で，109は分割された片側，110は分割途中の状態のもので，側面に敲打痕がみられる。111～116は擦切具で砂岩を薄く剥ぎ取り側面を調整して使用している。側面の刃部は摩耗が顕著である。また，長さ10cm前後で，刃部の幅が112・114のやや薄いタイプとやや大きい15cm程で刃部の幅が厚いタイプの111・113・115・116など２種類みられる。県内の遺跡では比較的出土量が多い。117・118は砂岩製の砥石で，砥面がかなり湾曲する117と表裏面を利用する大型の118があり，礫面が剥離されている。大型の礫面を使用しながら分割したりし，砥面を新鮮にしながら使用されている。119は砂岩製の石皿で，約１/５を欠損する。一部に農耕による傷が残るが，側面に玉抱き三叉文が彫り込まれている珍しい例である。



第17図　遺物実測図（*1～12・14*　1/6,　*13*　1/3）

SI11（*1～8*）　SI13（*8・2・10～13*）　その他包含層



第18図　遺物実測図（*15～26*　1/6,　*27～31*　1/3）
包含層

第19図　遺物実測図（1/4）

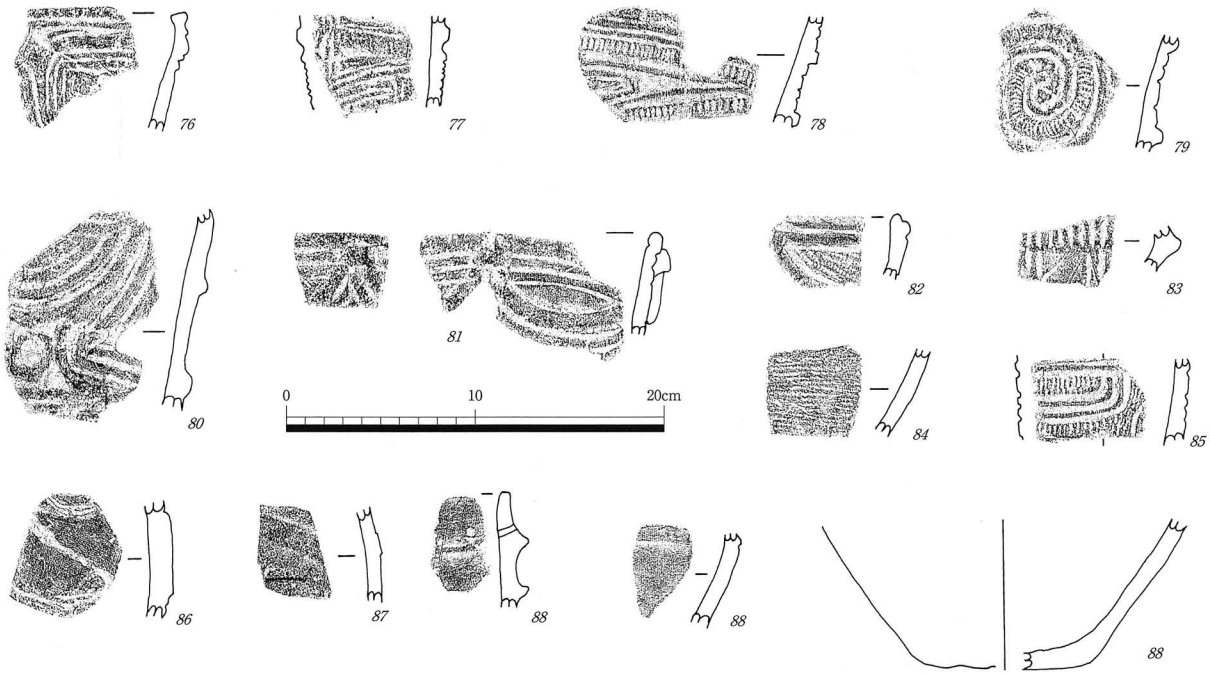
SI11（*34・42・56・57・58・61・74*）　SI12（*39*）　SI13（*37・47・55・60・65・69・70・73*）
その他包含層

D　まとめ

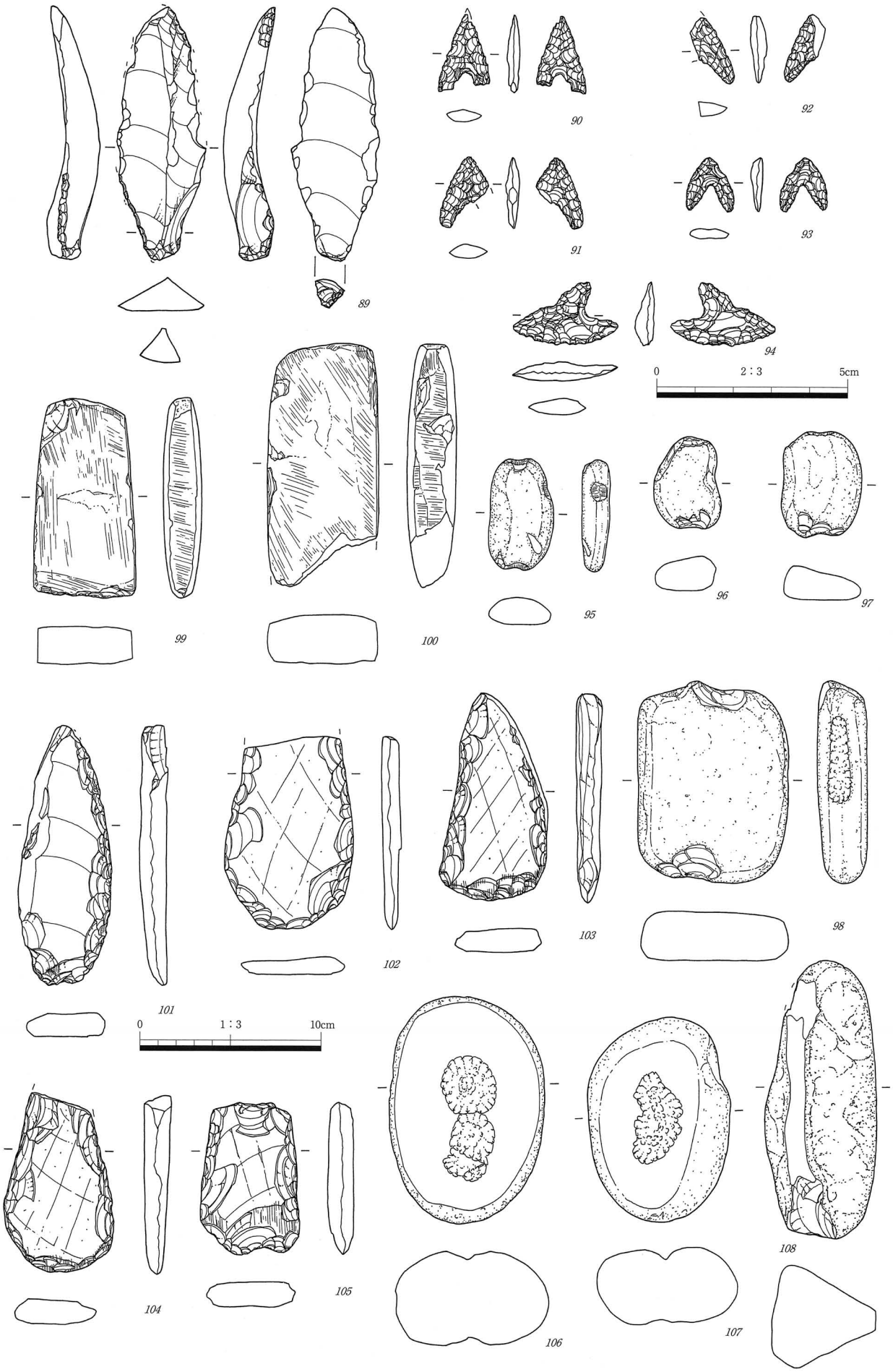
以上，土器は蓮華文や爪形文と無文帯や半裁竹管文を組み合わせたいわゆる新崎式の特徴をもつ。中でも口縁が直線的に開く４・８・９・17などでは，ほとんど文様帯の配置や構成には変化はみられない。また，１にみられる格子状の文様にもこれらの要素からも特に異なったところはみられない。２・６・９にみられる隆帯上の刻みは，爪形文と異なり綾杉状となっている。２では渦巻き隆帯を文様としている。その周りにはＢ字状の文様が施される。８・９などをみると口縁部に蓮華文や無文帯を持ち，この文様は胴部文様として使われている。８・９と比較すると２は口縁部の文様帯が省略されている。６では未発達の渦巻き文と三叉文が取り入れられ，天神山式に近い文様構成となっているが，口縁部にみられる隆帯文は，新崎式のなごりである。１では格子目文は半裁竹管を使い浅く沈線風に仕上げている。２・９をみるとＢ字状文の間はやはり同様に仕上げ，文様の施文方法の共通性がみられる。また18に取り入れられた渦巻き文は，斜行し連続しながらつながるが，天神山式のそれとは異なっている。波頂部にみられる突起も新崎式の入り字状突起の変化とも考えられる。14・18にみられる無文帯などへの刻みは，８にみられる丁寧な三角形から棒状工具による丸いものに変化するようである。20は台付きの深鉢だが，新崎式期にはほとんどみられない。天神山式のものだろうか。当該期の遺物は宇奈月町浦山寺蔵遺跡，婦中町鏡坂Ⅰ遺跡，庄川町松原遺跡などで出土しており，それらの資料との対比が必要と考えられる。この永代遺跡にみられる土器群とその様相が時間差として捉えることができるのか，新崎式から天神山式への過渡的な土器群の組成として捉えられるかは判然としないが，土器様式の変遷過程を示す一つの資料と考えられる。　（酒井重洋）

引用・参考文献

上市町教育委員会　1984　『永代遺跡』
上市町教育委員会　1994　『丸山Ｂ・眼目新丸山遺跡発掘調査概報』
小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年ー戦後の研究史と現状ー」『大境』第５号　富山考古学会
小島俊彰　1988　「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』小学館
富山県教育委員会　1977　『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』
婦中町教育委員会　2000　『富山県婦中町外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』

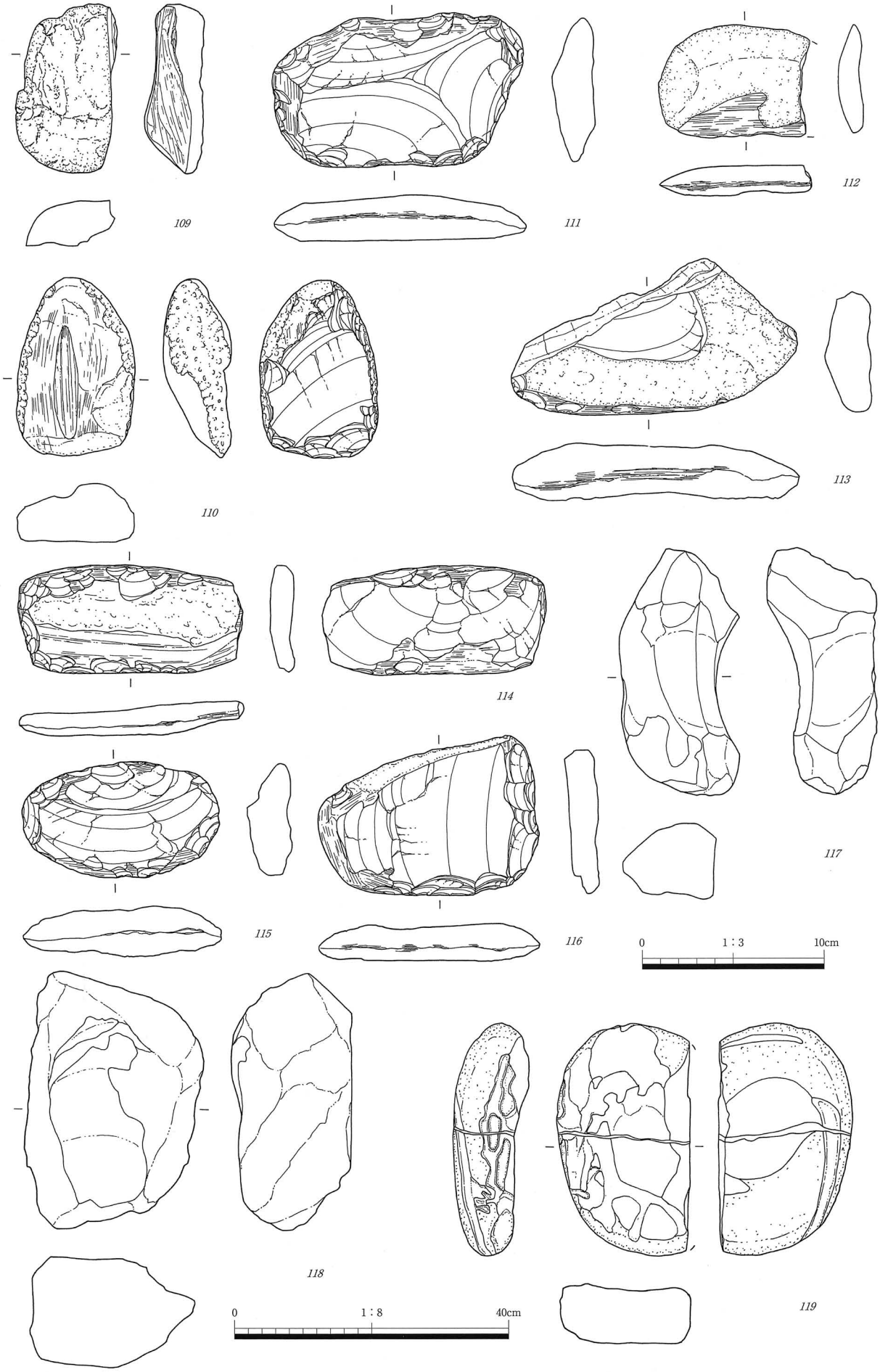


第20図　遺物実測図（1/4）
SI12（*88*）　SI13（*77・78・80・86*）　その他包含層

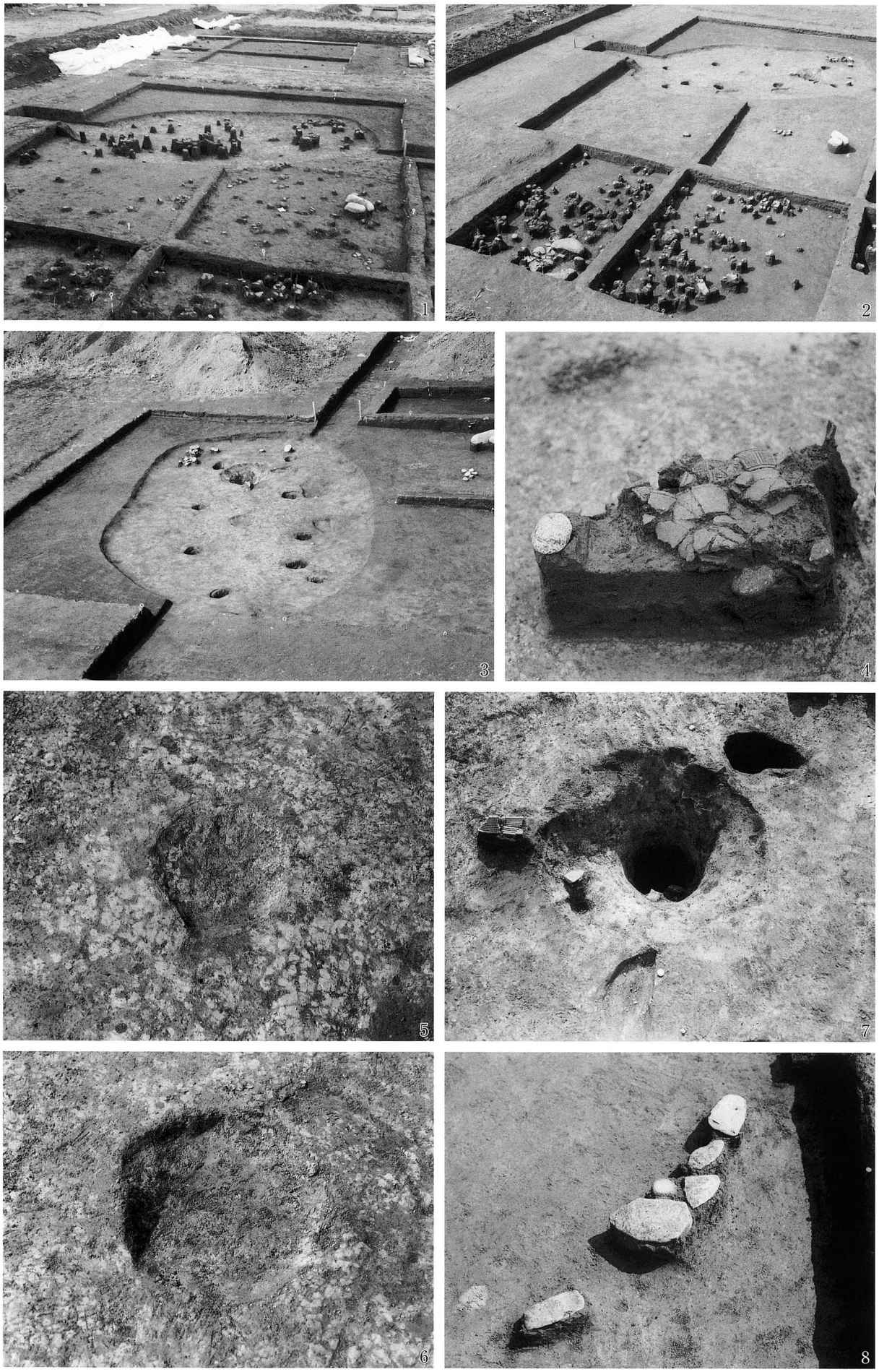


第21図　遺物実測図（*89～94*　2/3，*95～108*　1/3）

SI11（*97・105*）　SI12（*96・104・107*）　SI13（*106*）　その他包含層

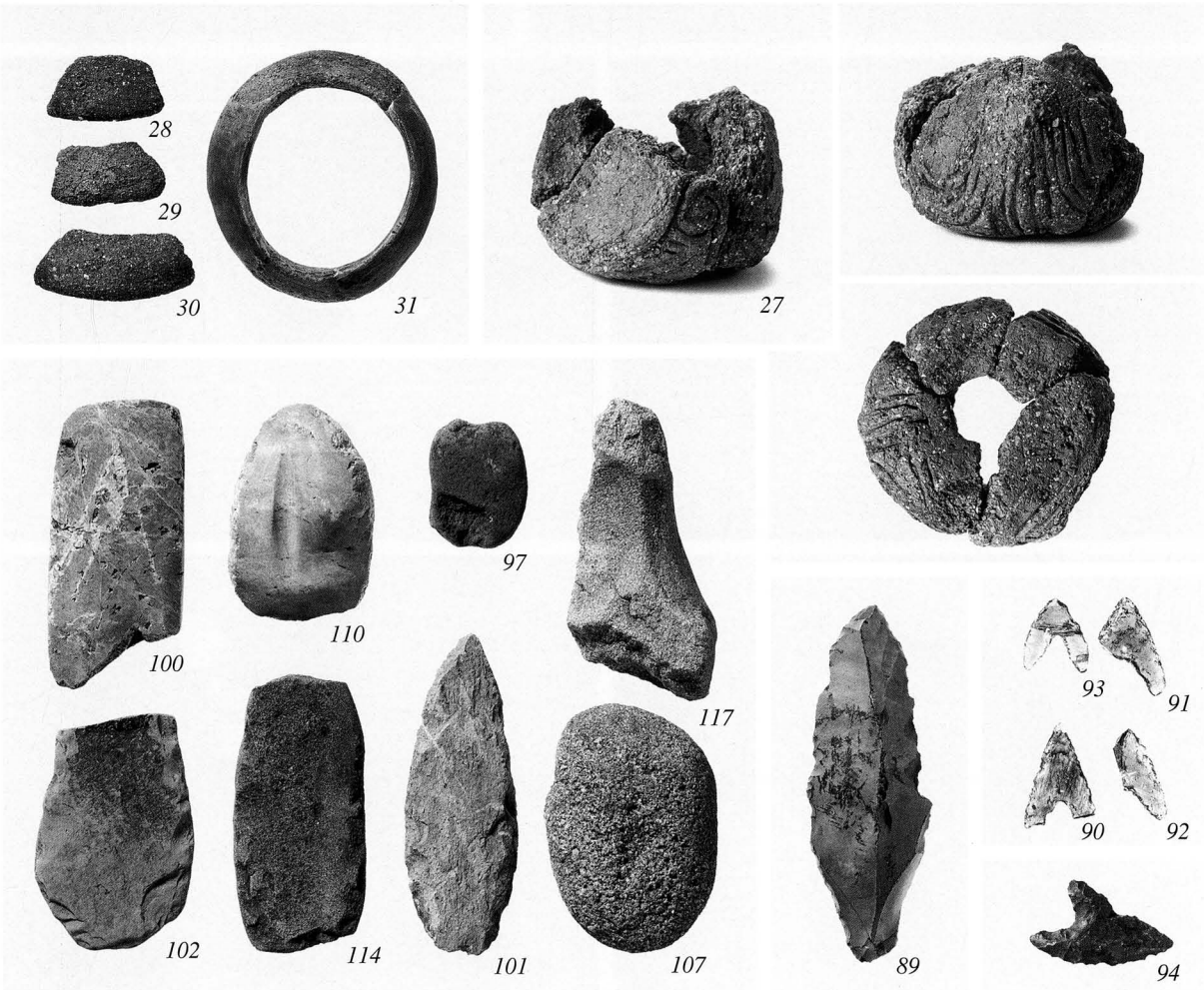


第22図　遺物実測図（*109～117*　1/3,　*118・119*　1/8）
SI12（*109*）　SI13（*112*）　その他包含層



図版９　遺構

1. SI11遺物出土状況（東から）　2. 遺物出土状況，SI13付近（東から）
3. SI11（南から）　4. SI11遺物出土状況　5.6. 地床炉　7. 漏斗状ピット　8. 石器出土状況



図版10　遺構・出土遺物

1. SI12遺物出土状況（西から）　2. 漏斗状ピット　3. SI12（西から）　4. 石組炉
SI11（*89・97*）包含層（*27～31・90～94・100～102・107・110・114・117*）

3　安居窯跡群

A　遺跡の概要

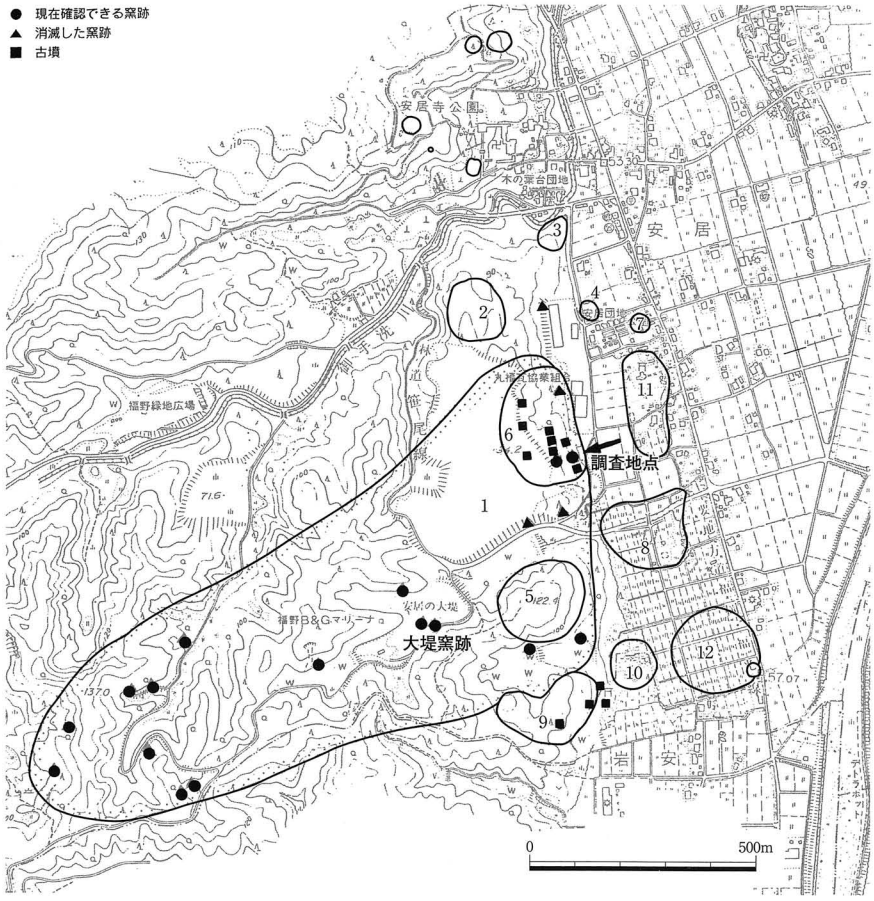
福野町は富山県の南西部に位置し，北は小矢部市と砺波市に接し，東は井波町，西は福光町，南は井口村に隣接する。地形的には，小矢部川左岸のわずかな丘陵部とその支流によって形成された平野で占められている。

安居・岩木須恵器窯跡群は，小矢部川中流域に分布する窯跡群でも南側に位置し，福野町と福光町にまたがる窯跡群で，蟹谷丘陵南西側の小丘陵中1.5～2.0kmの範囲に６支群が分布しており，７～９世紀にかけて16基の窯が操業されている。

安居地内の丘陵では，昭和61年に工業用団地造成計画が策定され，造成地内の土砂を東海北陸自動車道の盛土として搬出し，跡地を民間会社の資材置き場に現在利用している。

この事業に関連して福野町教育委員会では，三件の本調査がこれまで実施されてきた。

昭和63年度には，工業用地の土砂搬出道路として丘陵裾部の五百歩遺跡が調査された。その結果，縄文時代後期初めの気屋式一括資料と多くの土器や石器が出土した。この他にも弥生時代後期の遺物や古代の建物跡が検出されている〔林他1990〕。また平成元年度には安居の大堤を利用し，福野マリーナボート練習場造成に伴って大堤第１・２号須恵器窯跡（地下式）と灰層が発掘され，奈良時代中頃の台付き環状瓶をはじめ多数の須恵器が出ている。更に平成２年春には工業用団地造成にかかる丘陵上から東斜面に立地する三基の墳丘墓（第２図，安居遺跡４～６号墓）があったが，５・６号墳はすでに破壊を被っていたとのことで，遺存状態のよい４号墓の本調査が行われ，弥生時代後期末の方形周溝墓を発掘し，土器と鉄器（刀子）を検出している〔林1990・1991〕。



第23図　周辺の遺跡

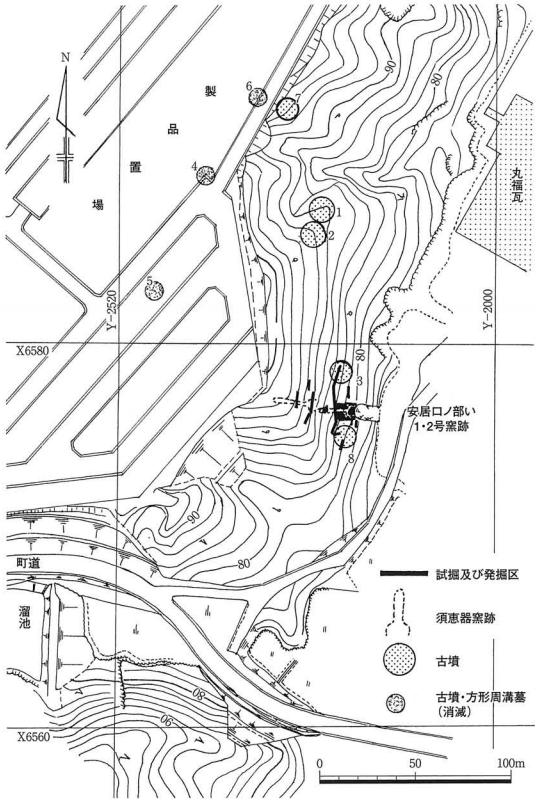
	遺跡名	時　代
1	安居窯跡群	古墳・奈良・平安
2	堂山遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
3	石黒墳墓	中世
4	安居D遺跡	弥生・古墳
5	安居城跡	中世
6	安居遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
7	安居C遺跡	縄文
8	五百歩遺跡	縄文・弥生・奈良～室町
9	善法寺遺跡	奈良・平安
10	善法寺古墳群	古墳
11	堀池遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
12	三本松遺跡	縄文・奈良・平安

第３表　遺跡一覧

上記の安居地区の丘陵では，墳墓や須恵器窯跡が築かれ，更に山麓から台地上にかけて，旧石時代以降，縄文・弥生・古墳の各時代や古代・中世に至る多くの遺跡群が確認されており，長い期間にわたって人々の生活が営まれている（第23図）。

安居窯跡群については，福野町史の他に安念・林氏等による各窯跡ごとの踏査による資料紹介〔安念他1985〕，或いは北陸の古代土器研究会では窯跡群全体の概要と出土遺物の検討から各窯の編年が示されている〔安念1988〕。今回，発掘調査した須恵器窯跡は安居ロノ部地内に存在し（第24図），調査地区は昭和63年春，西井龍儀氏により須恵器が採取された地点で，安居ロの部い２号窯として報告された窯跡に該当する。このたび発掘の二基の窯跡は，上記の経緯から安居ロノ部い１・２号窯と呼称する。

この北側約250m隔てた丸福瓦工場背後の丘陵裾部からは，昭和32年に７世紀前半の須恵器甕片が採集されているが，この安居ロノ部に窯跡はすでに消滅した可能性がある〔西井1988〕。



第24図　地形と発掘区

また，窯跡周辺の丘陵斜面には現在も墳墓・古墳が５基残っており，１・２号墳の側には町指定文化財安居墳墓群の標柱が立てられている。１・２墳は直径約13mの大きさをもつ円墳であり，墳頂部がほぼ平坦な状態をなし高さ約1.5mと低いが，山側に周溝を残している。３号墳の円墳は約80m南側に隔てて築かれ，今回新たに円墳と確認した第１号須恵器窯跡の南側の古墳を８号墳と呼ぶことにした。

B　遺　構

調査地は約20～25度の勾配を有する緩やかな丘陵斜面で，標高75～95mを測り，対象地の約30mの枠内において古墳と須恵器窯跡各２基を発掘した。古墳は安居墳墓群として通し番号としたために，先に報告したレポートでの１号墳を３号墳に，２号墳を８号墳に改める。

古墳（第25図）

３号墳　古墳は標高82～85mに築かれ，規模は直径約８mと小さく平坦な墳丘部に幅約0.9mの周溝が山側に巡る。古墳の中程に入れたＴ１試掘溝の断面では，表土や自然堆積層の下に0.5～0.8mの地山層を含む盛土層があり，円墳中央に上方で幅3.5m，下方の地山面で幅2.5mを掘りこんだ墓坑用の盛土がほぼ水平に盛土されている。

８号墳　古墳は３号墳の南方21m隔てた標高78～82.5mの斜面に築かれる。Ｔ６・７の２カ所に試掘溝を入れ山側の周溝から，高さ約１mの平坦な墳丘をもつ直径約９mの円墳と確認した。

遺物はＴ６から須恵器甕口縁部等が出ているが，須恵器灰層の遺物の可能性もある。

須恵器窯跡（第24・25図）

窯跡は同一斜面の延長上にあり，先行する１号窯跡が下方に，後出の２号窯跡が上方に築かれる。

１号須恵器窯

窯跡は，標高79～85.5mを測る約20度の勾配をもつ斜面に直交し築かれる。１号窯では窯前庭部上層やその周辺一帯にまで，上方の２号窯跡から廃棄された灰層遺物が広がっている。

規模　窯体の一部を発掘したため，全体の長さは推定で11.5m，窯の主軸方向は西に89度を向き，煙出し付近で標高86.5m，焚口底面の標高79.7mを測る。前庭部の大きさは幅約4.5m，長さ約5mあり，下方の灰層は後世の土取りにより，主要部がすでに消失しているようである。

窯体　煙出し付近の８・９区の調査では，表土下層の黒褐色土に２号窯の須恵器が多く出土し，包含層の調査に留めた。このＣ８・９区の灰層から多くの須恵器の他に土馬・土錘・陶棺が検出された。Ｋ－Ｋ´セクションでは，南側寄りに位置する窯体の幅が1.2mと狭く，床面まで掘り下げていないが，下層から杯・蓋がまとまって出てきた。窯体北側には煙出しから斜面下方方向に窯体と平行し伸びる排水溝にあたる深い落ち込みを確認した。

焼成部Ｌ－Ｌ´セクションでは，遺構検出面から床面まで2.5mと深く，床面幅も2.0mと広く，地山酸化面は床面と両側壁1.0mの高さまで残り，側面上部から天井部の酸化部は窯体下部に崩れ落ち，その上層に堆積する８～18層が主に天井構築土層とみられる。なお，床面には北側壁面に沿って，幅0.3mの排水溝が配置され溝上に甕体部片が敷き並べられていた。また，窯体外の北側に隣接する溝は，上部幅1.5mの落ち込みをなし，煙出しから連続する排水溝または作業用溝とみられ，更に窯体に沿って下方に伸びて狭くなり，深さも徐々に浅くなっている。

燃焼部Ｍ－Ｍ´セクションでは，遺構検出面から床面まで1.7mと深く，底面は砂層に覆われる。床及び窯の幅は1.3mと焼成部に比べ狭くなり，側壁の酸化面は0.8mの高さまでで，床面から少し湾曲した壁面である。７・８層は側壁等の崩壊土で，４～６層が天井構築土とみられる。

焚口Ｎ－Ｎ´セクションでは窯幅が1.7mと燃焼部に比べ少し広いが，側面の高さが0.9mと低い。炭層または炭を多く含む層（12・13・17層）は，下層に薄く存在している。

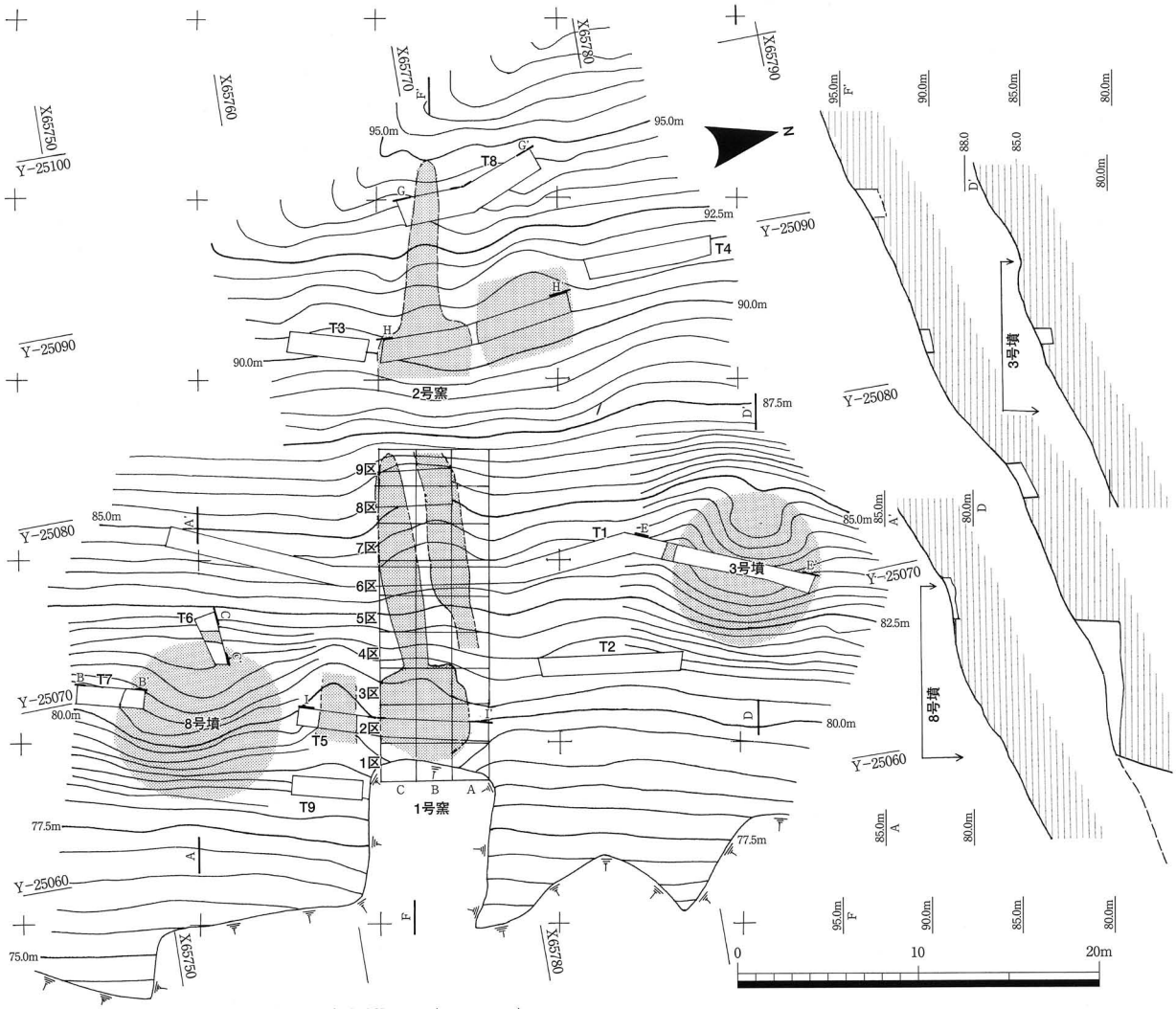
前庭部は焚口前に広がる窯操業の作業用スペースであり，平面形が隅丸方形をなし幅・長さが約4.5mの大きさをもった最終操業時の形態で，焚口から1.0m隔てた南側隅は地山を抉り込んで広くし，また北側隅に直径約0.7mピットを設けている。

前庭部中程のＯ－Ｏ´セクションでは，0.5mの間隔を置いて上下に炭層が存在する。上面の４層（調査時31層）は１号窯の最終灰層にあたり，下面の12層（調査時38層）以下は操業当初の炭層に該当し，更にその二層の間に炭化物を多く含む三つの層が確認でき，焚口の土層と状況が異なり何回かにわたる掻き出しの灰層が確認できる。北側の壁面にあたる下層の13層（調査時44層）から4～７，14等の蓋や杯Ｈ等操業当初の須恵器がまとまって出土している。前庭部末端部にあたるＩ－Ｉ´セクションでは，最終時灰層にあたる８層の上層に窯から掻き出した焼土粒を含む黄褐色土を盛り上げ，高くなった箇所を含め前庭部の一部として利用している。

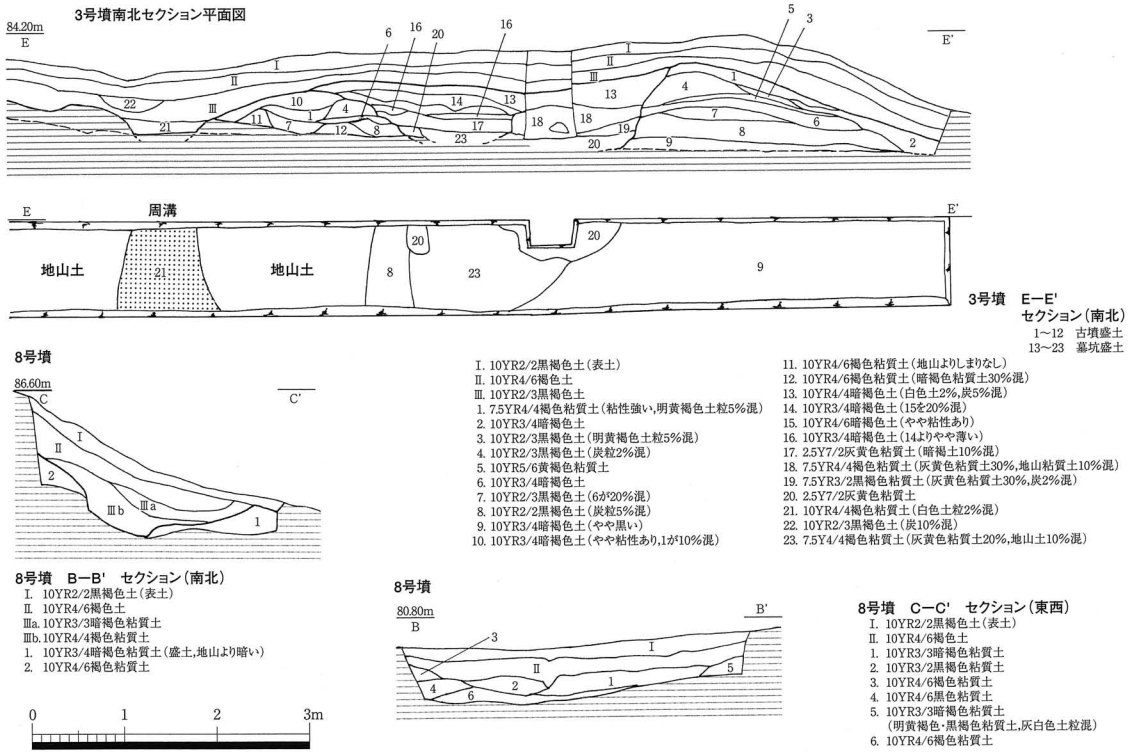
また，前庭部の1.0m隔てた南側には，上幅3.0mで深さ１m程の溝状の掘り込みがあり，窯の掻き出し土が堆積している。全体の規模は明らかでないが，窯の補修用採土跡とも考えられる。

１号窯の縦断Ｃ－Ｃ´セクションでは焼成部の床面勾配が約26度，地下式で床面から天井までの高さが1.4m程を有し，焚口近くは半地下式の構造であったことを示している。また，前庭部には操業初期の灰層38層と最終時の灰層30層があり相互関係がわかる。

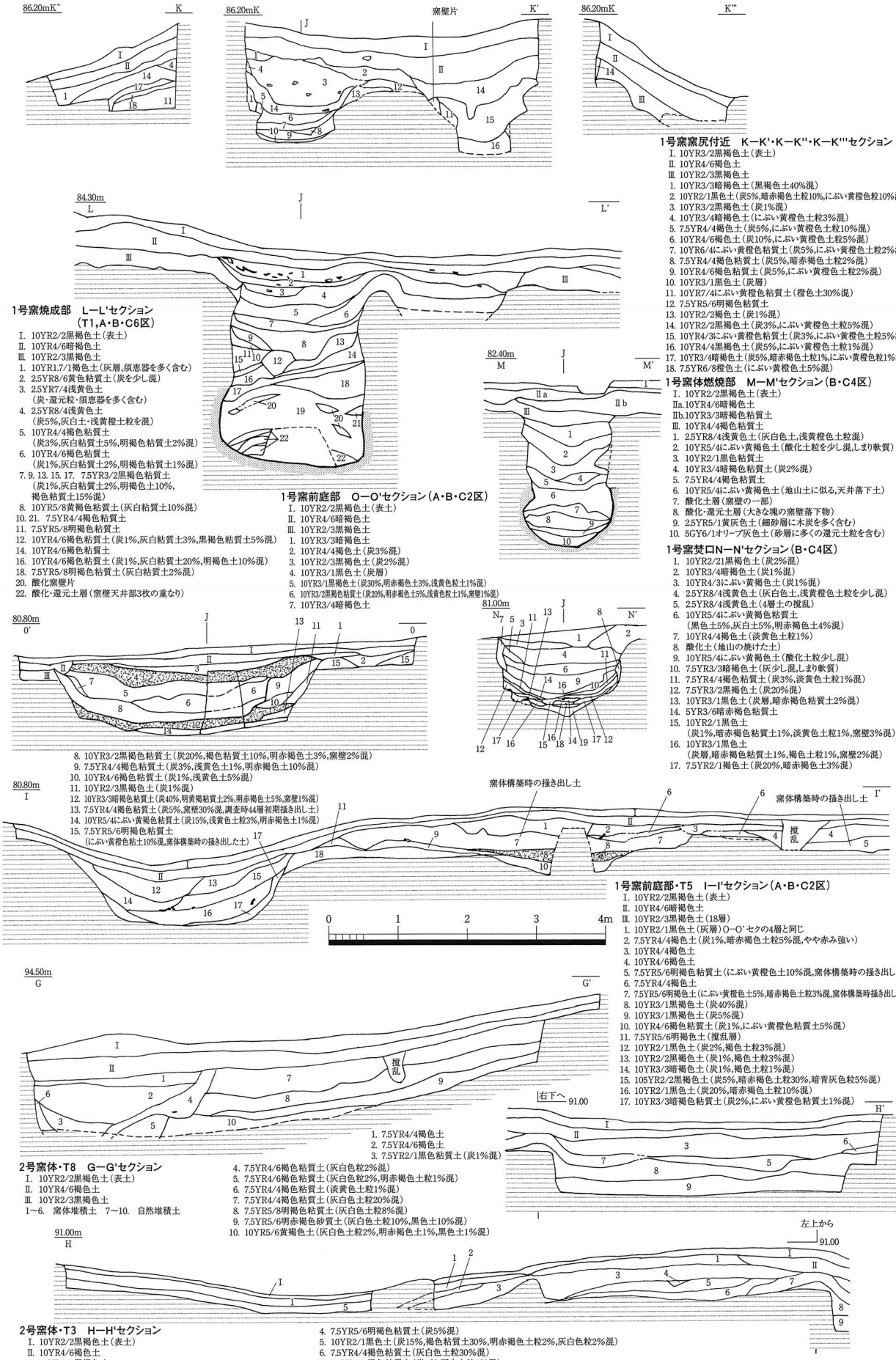
遺物　１号窯の出土遺物は少なく，床面からのわずかな遺物は焼成部北側の排水溝上に敷かれた甕片が殆どであり，前庭部では下部灰層から最終灰層までに含まれた須恵器である。窯跡・前庭部上面の遺物は２号窯の灰層の広がりに伴うものである。ただ，調査後の整理作業では，前庭部両側のＴ２，



第25図　トレンチ配置図及び遺構図（1：400）



第26図　遺構実測図（1：80）
3号墳　8号墳



1号窯窯尻付近　K−K'・K−K''・K−K'''セクション

Ⅰ. 10YR3/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6褐色土
Ⅲ. 10YR2/3黒褐色土
1. 10YR3/3暗褐色土(黒褐色土40%混)
2. 10YR2/1黒色土(炭5%,暗赤褐色土粒10%,にぶい黄橙色粒10%混)
3. 10YR3/2黒褐色土(炭1%混)
4. 10YR3/4暗褐色土(にぶい黄橙色土粒3%混)
5. 7.5YR4/4褐色土(炭5%,にぶい黄橙色土粒10%混)
6. 10YR4/6褐色土(炭10%,にぶい黄橙色土粒5%混)
7. 10YR6/4にぶい黄橙色粘質土(炭5%,にぶい黄橙色土粒2%混)
8. 7.5YR4/4褐色粘質土(炭5%,暗赤褐色土粒2%混)
9. 10YR4/6褐色粘質土(炭5%,にぶい黄橙色土粒2%混)
10. 10YR3/1黒色土(炭層)
11. 10YR7/4にぶい黄橙色粘質土(橙色土30%混)
12. 7.5YR5/6明褐色粘質土
13. 10YR2/2褐色土(炭1%混)
14. 10YR2/2黒褐色土(炭3%,にぶい黄橙色土粒5%混)
15. 10YR4/3にぶい黄橙色粘質土(炭3%,にぶい黄橙色土粒5%混)
16. 10YR4/4黒褐色土(炭5%,にぶい黄橙色土粒1%混)
17. 10YR3/4暗褐色土(炭5%,暗赤褐色土粒1%,にぶい黄橙色粒1%混)
18. 7.5YR6/8橙色土(にぶい黄橙色土5%混)

1号窯焼成部　L−L'セクション(T1,A・B・C6区)

Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6暗褐色土
Ⅲ. 10YR2/3黒褐色土
1. 10YR1.7/1褐色土(灰層,須恵器を多く含む)
2. 2.5YR8/6黄色粘質土(炭を少し混)
3. 2.5YR7/4浅黄色土
(炭・還元粒・須恵器を多く含む)
4. 2.5YR8/4浅黄色土
(炭5%,灰白土・浅黄橙土粒を混)
5. 10YR4/4褐色粘質土
(炭3%,灰白粘質土5%,明褐色粘質土2%混)
6. 10YR4/6褐色粘質土
(炭1%,灰白粘質土2%,明褐色粘質土1%混)
7. 9. 13. 15. 17. 7.5YR3/2黒褐色粘質土
(炭1%,灰白粘質土2%,明褐色土10%,
褐色粘質土15%混)
8. 10YR5/8黄褐色粘質土(灰白粘質土10%混)
10. 21. 7.5YR4/4褐色粘質土
11. 7.5YR5/8明褐色粘質土
12. 10YR4/6褐色粘質土(炭1%,灰白粘質土3%,黒褐色粘質土5%混)
14. 10YR4/6褐色粘質土
16. 10YR4/6褐色粘質土(炭1%,灰白粘質土20%,明褐色土10%混)
18. 7.5YR5/8明褐色粘質土(灰白粘質土2%混)
20. 酸化窯壁片
22. 酸化・還元土層(窯壁天井部3枚の重なり)

1号窯前庭部　O−O'セクション(A・B・C2区)

Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6暗褐色土
Ⅲ. 10YR2/3黒褐色土
1. 10YR3/3暗褐色土
2. 10YR4/4褐色土(炭3%混)
3. 10YR2/3黒褐色土(炭2%混)
4. 10YR3/1黒色土(炭層)
5. 10YR3/1黒褐色土(炭30%,明赤褐色土3%,浅黄色粒土1%混)
6. 10YR3/2黒褐色粘質土(炭20%,明赤褐色土5%,浅黄色粒土1%,窯壁1%混)
7. 10YR3/4暗褐色土
8. 10YR3/2黒褐色粘質土(炭20%,褐色粘質土10%,明赤褐色土3%,窯壁2%混)
9. 7.5YR4/4褐色粘質土(炭3%,浅黄色土1%,明赤褐色土10%混)
10. 10YR4/6褐色粘質土(炭1%,浅黄色土5%混)
11. 10YR2/3黒褐色土(炭1%混)
12. 10YR3/3暗褐色粘質土(炭40%,明黄褐粘質土2%,明赤褐色土5%,窯壁1%混)
13. 7.5YR4/4褐色粘質土(炭5%,窯壁30%混,調査時44層初期掻き出し土)
14. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土(炭15%,浅黄色土粒3%,明赤褐色土1%混)
15. 7.5YR5/6明褐色粘質土
(にぶい黄橙色粘土10%混,窯体構築時の掻き出した土)

1号窯体燃焼部　M−M'セクション(B・C4区)

Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱa.10YR4/6暗褐色土
Ⅱb.10YR3/3暗褐色粘質土
Ⅲ. 10YR4/4褐色粘質土
1. 2.5YR8/4浅黄色土(灰白色土,浅黄橙色土粒混)
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土(酸化土粒を少し混,しまり軟質)
3. 10YR2/1黒色粘質土
4. 10YR3/4暗褐色粘質土(炭2%混)
5. 7.5YR4/4褐色粘質土
6. 10YR5/4にぶい黄褐色土(地山土に似る,天井落下土)
7. 酸化土層(窯壁の一部)
8. 酸化・還元土層(大きな塊の窯壁落下物)
9. 2.5YR5/1黄灰色土(細砂層に木炭を多く含む)
10. 5GY6/1オリーブ灰色土(砂層に多くの還元土粒を含む)

1号窯焚口N−N'セクション(B・C4区)

1. 10YR2/21黒褐色土(炭2%混)
2. 10YR3/4暗褐色土(炭1%混)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色土(炭1%混)
4. 2.5YR8/4浅黄色土(灰白色土,浅黄橙色土粒を少し混)
5. 2.5YR8/4浅黄色土(4層土の撹乱)
6. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
(黒色土5%,灰白土5%,明赤褐色土4%混)
7. 10YR4/4褐色土(淡黄色土粒1%)
8. 酸化土(地山の焼けた土)
9. 10YR5/4にぶい黄褐色土(酸化土粒少し混)
10. 7.5YR3/3暗褐色土(灰少し混,しまり軟質)
11. 7.5YR4/4褐色粘質土(炭3%,淡黄色土粒1%混)
12. 7.5YR3/2黒褐色土(炭20%混)
13. 10YR3/1黒色土(炭層,暗赤褐色粘質土2%混)
14. 5YR3/6暗赤褐色粘質土
15. 10YR2/1黒色土
(炭1%,暗赤褐色粘質土1%,淡黄色土粒1%,窯壁3%混)
16. 10YR3/1黒色土
(炭層,暗赤褐色粘質土1%,褐色土粒1%,窯壁2%混)
17. 7.5YR2/1褐色土(炭20%,暗赤褐色土3%混)

1号窯前庭部・T5　I−I'セクション(A・B・C2区)

Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6暗褐色土
Ⅲ. 10YR2/3黒褐色土(18層)
1. 10YR2/1黒色土(灰層)O−O'セクの4層と同じ
2. 7.5YR4/4褐色土(炭1%,暗赤褐色土粒5%混,やや赤み強い)
3. 10YR4/4褐色土
4. 10YR4/6褐色土
5. 7.5YR5/6明褐色粘質土(にぶい黄橙色土10%混,窯体構築時の掻き出し土)
6. 7.5YR4/4褐色土
7. 7.5YR5/6明褐色土(にぶい黄橙色土5%,暗赤褐色土粒3%混,窯体構築時掻き出し土)
8. 10YR3/1黒褐色土(炭40%混)
9. 10YR3/1黒褐色土(炭5%混)
10. 10YR4/6褐色粘質土(炭1%,にぶい黄橙色粘質土5%混)
11. 7.5YR5/6明褐色土(撹乱層)
12. 10YR2/1黒色土(炭2%,褐色土粒3%混)
13. 10YR2/2黒褐色土(炭1%,褐色土粒3%混)
14. 10YR3/3暗褐色土(炭1%,褐色土粒1%混)
15. 105YR2/2黒褐色土(炭5%,暗赤褐色土粒30%,暗青灰色粒5%混)
16. 10YR2/1黒色土(炭20%,暗赤褐色土粒10%混)
17. 10YR3/3暗褐色粘質土(炭2%,にぶい黄橙色粘質土1%混)

2号窯体・T8　G−G'セクション

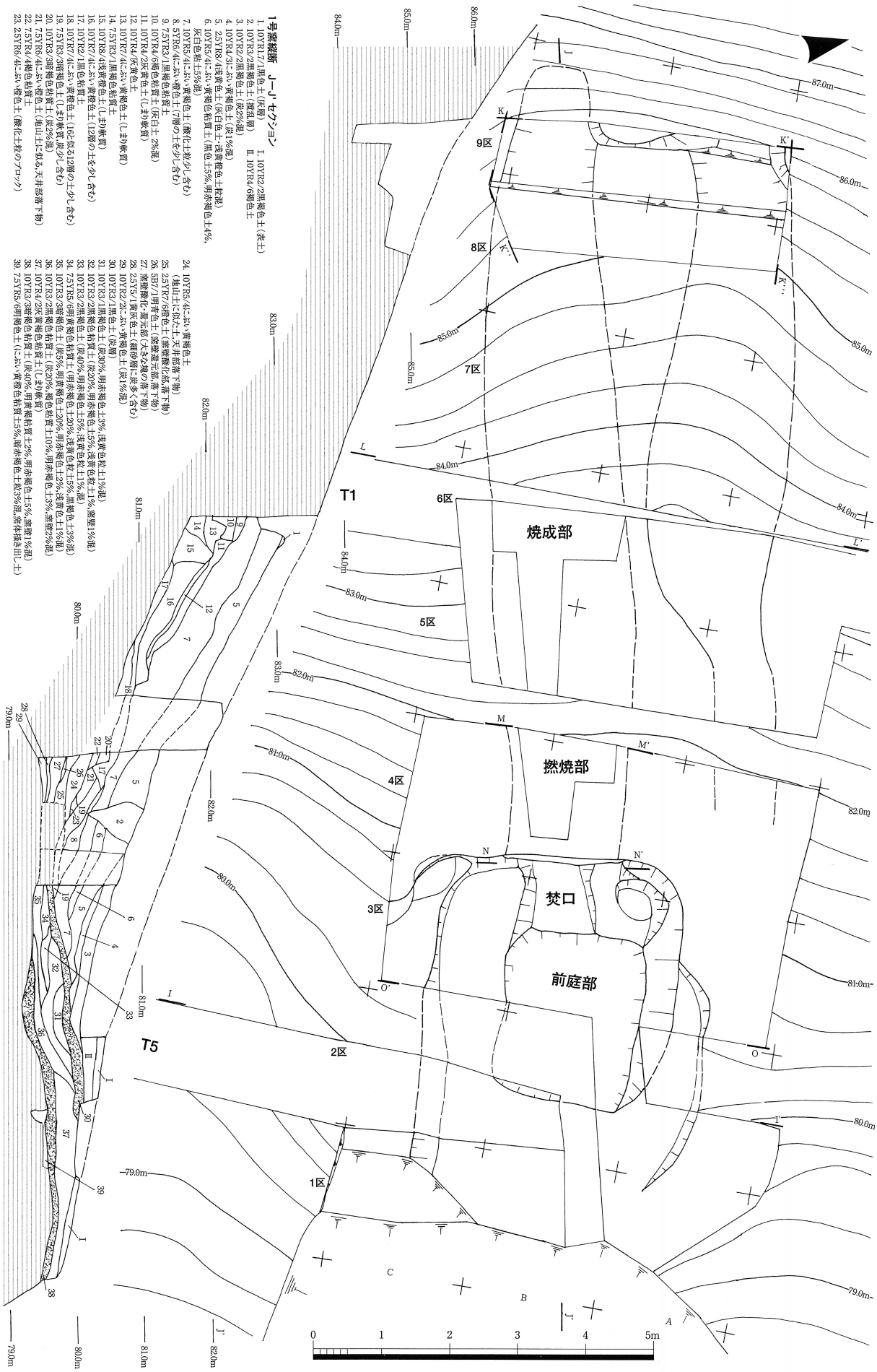
Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6褐色土
Ⅲ. 10YR2/3黒褐色土
1〜6. 窯体堆積土　7〜10. 自然堆積土
1. 7.5YR4/4褐色土
2. 7.5YR4/6褐色土
3. 7.5YR2/1黒色粘質土(炭1%混)
4. 7.5YR4/6褐色粘質土(灰白色粒2%混)
5. 7.5YR4/6褐色粘質土(灰白色粒2%,明赤褐色土粒1%混)
6. 7.5YR4/4褐色粘質土(淡黄色土粒1%混)
7. 7.5YR4/4褐色粘質土(灰白色土粒20%混)
8. 7.5YR5/8明褐色粘質土(灰白色土粒8%混)
9. 7.5YR5/6明赤褐色砂質土(灰白色土粒10%,黒色土10%混)
10. 10YR5/6黄褐色土(灰白色土粒2%,明赤褐色土1%,黒色土1%混)

2号窯体・T3　H−H'セクション

Ⅰ. 10YR2/2黒褐色土(表土)
Ⅱ. 10YR4/6褐色土
1. 10YR3/1黒褐色土
2. 7.5YR3/1黒褐色土(明赤褐色土粒2%,灰白色土粒2%混)
3. 10YR2/1黒色土(炭20%,明赤褐色土粒3%,灰白色土粒3%混)
4. 7.5YR5/6明褐色粘質土(炭5%混)
5. 10YR2/1黒色土(炭15%,褐色粘質土30%,明赤褐色土粒2%,灰白色粒2%混)
6. 7.5YR4/4褐色粘質土(灰白色土粒30%混)
7. 7.5YR4/4褐色粘質土(炭1%,灰白土粒2%混)
8. 7.5YR5/6明褐色粘質土(灰白土粒5%混,地山,黄色味強い)
9. 7.5YR5/6明褐色粘質土(灰白色粒1%混,8よりやや暗い)

第27図　遺構実測図(1：80)

1号窯　2号窯



第28図　遺構実測図（1：80）
1号窯

Ｔ５の須恵器と互いに接合する個体も存在した。

２号須恵器窯（第25・27図）

窯跡は標高90.0～96.0m付近に位置する。Ｔ３では長さ10mにわたり表土から0.5～0.6mの深さまで，灰層が存在し多くの須恵器を含む。トレンチのほぼ中間では地山面が一端上がり灰層が二分されるが，灰層上面の斜面に入れたＴ４では南端寄り2.5mに落ち込みがみられ，北側は自然堆積層である。この落ち込み下層からは須恵器２点が出ており，側壁や還元土等を確認していないが立地から２号窯跡とした。窯の規模は床面・煙出しが未確認であることから長さや幅が不明である。

２号窯の灰層は斜面下方80m付近で，トレンチの発掘から１号窯の主軸のおおよそ北側12m程までと，南側が７m程まで広がっていて，更に周辺にもまれに散布している。

土師器には還元焼成された２号窯とした甕片約80点がある。その出土は１号窯焚口近くの前庭部から52点，Ｔ５の溝状落ち込みから21点が検出され，還元焼成甕の約９割が１号窯の前庭部周辺に集中している。この他にはＣ8区が１点とＴ３から２点の検出がある。また酸化焼成の土師器は少なく先述の各地点から1～２点が出ていて，酸化焼成品は還元焼成品の１割と少ない量である。従来，須恵器窯跡からの還元焼成土師器の出土は，窯を利用し土師器焼成が行われた結果を示すものと考えられ，土師器と須恵器の生産集団に携わる相互の交流を示すものと理解されている。

なお，西井氏報告の遺物採集地点は主にＡ２区付近と現地で伺い，２号窯の遺物とみられる。

Ｃ　遺　物

遺物には須恵器窯の操業に伴う須恵器と若干の土師器等の他に，古墳時代や平安時代の土器がわずかに出ている。１はＴ３の灰層から出土した土師器の有段口縁壺で４世紀代である。２はＡ４区出土の土師器高杯であり３～４世紀に属する。３はＢ３区上層から出土した土師器杯底部で，外底面に糸切り痕があり９世紀代に含まれる。

１号窯（第30図4～32，34・35，第33図193・195・196，第35図309）

遺物は出土位置，層位から大きく三分される。最終操業時に伴うものは床面・前庭部下層・Ｔ５最下層出土の12・16・17である。初期操業時のものは前庭部下層（調査時44層）からの4～7・9・11・14・19・20・24・26～31・193 であり，その他は最終操業時に先行し，出土層位が前庭部下層からであるが，中下層出土品は２号窯に含め取り扱ったものもある。

杯Ｈ14は受部径が12.8cmで，12の蓋が口径11.4cmと小型化している。4～10の蓋は口径が13.0～14.6cmと幅があり，頂部と屈曲する稜には浅い沈線を引き頂部のほぼ全面を篦削りする。4～6は宝珠形の摘みを付け，7～10は摘みを欠いている。有蓋の高杯と考えたいが，組合わさる杯部がなくセット関係は不明確である。11は口径11.0cmの完形蓋であり，摘み以外は器形・調整方法が類似する。杯Ｇ蓋15～17は口径9.0～10.5cmの大きさで内面返りをもつ。18の椀は丸い外底面を篦削りする。また，19・193の鋺は体部に浅い凹凸を巡らせ金属器模倣器種とされている。20・21・195は高杯杯部であり，共に口縁部がわずかに外傾し，195は外面の稜に別個体の口縁部が付き内面に溶滓を付けた焼台転用品である。22は発掘品中唯一の甕の口縁部，24～26は平瓶の口縁部である。27は広口壺で底部を篦削りする。28～30は甕の口縁部であり，31は焼き歪み，内面に細同心円文叩きを施しており，この破片はＴ２にまで広がり散布している。32・35は土師器の還元焼成を受けたもので，32は甕，35は鉢であり，34は酸化焼成の甕である。

２号窯（第30～39図33・36～192，194，197～308，310～418）

杯Ｈ（39～56）蓋39～45は口径9.7～11.0cmで器高3.1～3.5cmであり，44のように外面頂部に篦切り